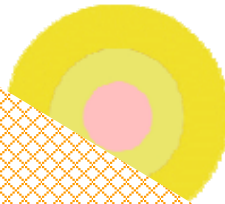


やまご池



復元された越前禅定道に立つ「川上御前社」(by N.Toga)



金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報 vol. 29

目 次

	(頁)
OB会会長あいさつ「ベルクハイムへの憧れ、再び。」	20期 久富 象二 1
【小屋作業に寄せて】	
2014年春の小屋作業に参加して	15期 上馬 康生 2
ワングルのふるさとを訪ねて（前年度主将）	57期 池田 勇馬 3
【OB会活動便り】	
近畿支部活動報告	11期 加藤 忠好 5
東海支部活動報告	16期 川端 俊朗 10
東海支部 百々峰（どどみね）PW	17期 渡邊 和文 10
W・ウェストンと古代東山道～『古代東山道を行く』PW余談	17期 小島 敬 11
2014年OBスキー合宿に寄せて	13期 辰野 隆義 14
【同窓会便り】	
11期 KUWV一期一会の集い in 明治村	11期 加藤 忠好 16
15期同期会 みなと神戸・須磨の章	15期 舟田 節子 17
17期の仲間達 in 小淵沢	17期 渡邊 和文 20
【現役より】	
主将あいさつ	58期 梅田 雄大 21
雨の北アルプス	58期 坂本 沙紀 21
一年度の思い出	59期 山路 遼太郎 22
【投稿の頁】	
北緯53度の誘惑～カムチャッカPWに参加して	17期 小島 敬 25
晩年？の山旅	15期 舟田 節子 31
いつかある日・若き日のノスタルジー	8期 篠島 益夫 34
OB南竜PWにメロンの差し入れ	14期 仁藤 早苗 35
【事務局から】	
OB会費 納入のお願い	36
編集後記	37

表紙の言葉＜越前禅定道＞（梶 典雅/19期）

白山には、平安時代に開かれたとされる三つの禅定道がある。「美濃」は「いとしろ大杉」から上部が石徹白道（南縦走路）として以前からずっと使われており、「加賀」は一里野 - 四塚山間が1987（昭62）年に復活した。一方、「越前」は、平泉寺 - 法恩寺山間や小原林道 - 小原峠間（赤兎山登山道）のほか、観光新道となっている別当坂（尾根）から黒ボコ岩を経て室堂に至る登山道がほぼ禅定道であると言ってよい。

さて、市ノ瀬から六万山に登り、別当坂に至る道（通称「旧道」）は、昭和40年代以降、廃道化していたが、1999（平11）年に復元。また、三ツ谷 - 小原峠間も杉峠への道とともに整備され（2008年開通）、越前禅定道の道筋の大半を辿れるようになった。

その古道沿い、ブナに囲まれひっそりと立つ「川上御前社」。三ツ谷出身の有志により1988年に再建されたもので、泰澄大師が白山開山後、彫った女神像をここに祀ったと伝えられる。

表紙写真：梶 典雅（19期） 表紙題字：中川 晃成（23期）

「ベルクハイムへの憧れ、再び。」

20期 久富 象二

春の小屋酒場については上馬さんにご報告をいただいています。現役生が参加してくれて、黒崎さんが腕を揮ってくれたカレーライスを皆で食べ、小屋で1泊し、現役生がOBの長岡さんと上馬さんと一緒に高三郎に登りました。高三郎の登山道の荒れようは、上馬さんの報告をお読みください。

7月に現役生とOB会役員で意見交換会を開きました。現役生がこの高三郎登山をどう感じたか、また今後ベルクハイムの維持に関心があるかについて率直に話し合うことを目的としたもので、顧問の竹内先生、上馬さんにも参加いただきました。

現役生の意見や感想からすると、今回の高三郎登山にはかなりつらい思いをしたようで、「遭難」の危機を感じていた学生もあり、今後登るかどうかは登山道の整備状況による、というニュアンスで受けとめました。一方、ベルクハイムの維持・小屋作業には関心が強く、今後も参加していきたいという意見が多くあり心強く思いました。

秋の小屋酒場は現役生との連絡がうまく行かず、OBだけで行うこととなりましたが、新道の一部を整備することができ、全体を整備するために必要な人数と時間のおおよその目途を立てることができました。辰野さん、吉本さん(ともに13期)、上馬さん(15期)、北川さん(16期)、黒崎さん(22期)、久富が参加しました。現役生の不参加は、単純な連絡ミスによるもので、次回は参加してもらえるものと思っています。

ベルクハイムをめぐる環境の変化にはこれまでも触れてきました。このところ犀川ダムまでの県道の通行可否を含め、事前の下見をしたうえで小屋酒場の実施を判断してきています。倉谷川の流れは大きく変化し雨量計周辺は、かつての道が完全に水没し、渡渉あるいは高巻きを迫られる「難所」となっていますが、春の小屋酒場の前に、ボートの送迎をお願いしている山本さん(以前お願いしていた山下さんの甥っ子さん)が、木材とロープ・鎖で淵に沿って歩けるように造作していただきました。後日山本さんが春に学生が倉谷に入るのをとても楽しみにしていた、ということをダム管理事務所の方から聞いて、大変有難く思い、また山本さんの倉谷への愛着の深さを感じました。

「高三郎に登らないのに、ベルクハイムを維持する意味があるのか。」との問いに、明確な答えは持ち合わせていません。ただ、人力だけで運び積み上げられたベルクハイムの土台の数多くの大きな石を見ると、ベルクハイム建設の趣旨の気高さと投入された労力の貴さに思い至ります。前回も書きましたが、ベルクハイムを長生きさせねばと思います。OBの皆さんと現役生の協力です。ベルクハイムへの憧れは、まだ続きます。

〈日程〉

2014年5月31日～6月1日（1泊2日）

〈参加者〉

長岡正利（11期）、大島良治（13期）、辰野隆義（13期）、吉本良治（13期）、上馬康生（15期）、奥名正啓（15期）、北川隆次（16期）、中野淳一（16期）、久富象二（20期）、黒崎敏男（22期）森 恵利子（22期）、井上雄大（56期）、池田勇馬（57期）、竹本和生（57期）、田村隆典（58期）、田所耕平（58期）、立花良彬（58期）、田巻柗野（58期）、以上OB 11名、現役7名の計18名

〈作業内容〉

小屋の屋根の雨漏り箇所の修繕、ペンキ塗り、小屋周辺の草刈り、川原から小屋への道の補修と草刈り、小屋から雨量計付近への迂回路の刈払い及び高三郎山登山道の状況調査を実施。

高三郎山へ

山小屋と周辺の状況については、近年の「やまざと」等で紹介されているので、今回は高三郎山登山を振り返りながら、道の近況などをお話します。私としては、2007年と2008年の春の小屋作業の時に登って以来6年ぶりの高三郎山であった。初めは長岡さんとふたりだけのつもりが、31日に小屋で現役生たちと話をしていると誰も登ったことがなく、せっかくだからこの機会に山頂まで行かないかと誘ったところ、7名全員が参加することになった。

1日は4時前には起床し、黒崎さんが早くから起きて用意してくれていた朝食をとり、4時30分に9名で出発した。天気は快晴で、暑くなりそうな日であった。倉谷川沿いの刈り払われた道を行き、金山谷を渡り4時50分に新道に取りつく。道はしっかりしているがササや低木の多い急な坂道をゆっくりしたペースで、昔は新トレで20～25kgのキスリングを担いで喘ぎながら上ったことを話したり、まだ朝早くで休んでいるカラスアゲハを近くで見たりしながら進む。5時45分頃、道が平坦になったところのブナの幹にツキノワグマの新しい爪痕を見つけた。枝先には今年の新しい実が付いていたことから、4月下旬頃にブナの花を食べに上った時についた爪痕であること

を話す。クマの痕跡は別の場所にも見つかり、そこにはブナの枝を折って積み重ねられたクマ棚が見られた。道はササが多くて分かりにくいところもあるが、ところどころ刈払いの跡もあり、比較的わかりやすく迷うことはなく、砺倉分岐に6時50分に到着した。

クラコン尾根に入るとブッシュはひどくなり、木の枝をかき分けながら行くことが多くなり、遅れる者が出てきて後続を待つことが増えてくる。終わりかけのホンシャクナゲやウラジロヨウラクの花を見て、高三郎の山頂や、岩の斜面を見せる旧道尾根の向こうに倉谷川右岸の山々を眺めながら、清々しい新緑の中を進む。ヒノキの大木が続く痩せ尾根を行き、岩場のところで長めの休憩を取り、道を覆う枝につかまりながら急登を終えて旧道との分岐に着いたのは8時40分頃であった。

分岐からは、ところどころ多くはないが残雪が出てくる。道はブッシュがひどく、雪があれば、歩きやすい雪の上に行く。高三郎山（三角点）には9時20分によやく着いた。予定より1時間ほどオーバーしていた。木の枝の間に残雪の多い白山が何とか見えたが、よく眺められる場所を探



して少し先へ向かおうとしても道はまったく分からず、木に邪魔をされて進むことも困難で、あきらめる。山頂はササなどに覆われていたが、少し北側には雪が残り、そこで昼食のおむすびを食べる。遠く白馬岳から槍・穂高岳までを眺めることができた。

10時頃に山頂を出発して分岐まで戻り、旧道を下る。分岐からすぐの崩れやすい急斜面と草付に手こずり、その後もブッシュでほとんど分からなくなった道を捜しながら下って行く。前高（1089m）までは何とか下りてきたが、そこからの下りで道に迷ってしまい、コシアゲ谷側の斜面へ入ってし

まう。上り直して、途中からトラバースして尾根道に出てしばらく下る。疲れてきている者もいてペースがあがらず、予定の時刻13時に小屋に着くことが困難となった。下山が遅れることを伝えるために私と池田さんが先行し、後のメンバーは長岡さんに任せることにする。

その後も、予想以上にブッシュがひどく、再び迷い今度は倉谷側の斜面へ入り込んでしまい時間を費やす。林越しに見える地形を頼りに尾根道に戻り、下って行くが、すぐに道が分からなくなる。とにかく横に伸びた多くの低木で道が隠れている箇所が多く、どこが道か分からなくなってしまっていた。道の場所の記憶を頼りに何度か見失いながらも、14時45分ようやく旧道登山口の川原まで下りてきた。小屋に着くと久富さんと黒崎さん、ボートでの送り迎えをしてもらっていた山本さんが心配して待っておられた。

予想外に時間を費やしたので、長岡さんのグループの方が先に着いているものと思っていたが、彼らも迷うことが多かったようで、約1時間遅れで16時過ぎに全員小屋まで戻ってきた。先に下りながら、心配して犀川ダムで待っておられた大島さん、辰野さん、吉本さん、奥名さん、森さんのところまで、全員が帰ってきたのは17時過ぎであった。ダム湖の奥にそびえる高三郎を見て、全員の無事に感謝の思いでいっぱいであった。苦労したであろう現役生にはどのように映ったことだろう。



感想と今後について

6年前に登った時は5月中旬で、まだ残雪が多かったことと、芽吹き直後か芽吹き前で見通しもよく歩行に苦労した覚えがなかった。また高三郎山の道は何度も歩いていたので、少しくらいのブッシュには不安はなかった。その油断と時間的に余裕が無くなったことによる焦りから、ルート判断

を誤り、池田さんを初めとする現役の皆さんには不安な思いをさせてしまった。また帰りを心配して待っていただいた皆さんには大変なご迷惑を掛けてしまった。誠に申し訳なく思っている。

道の荒れようは予想外にひどく、特に旧道は残雪期でもなければ、とても歩けたものではない。道の整備には、刈払い作業の困難さだけでなくルート判断も要求されるので、かなりの労力が必要となるだろう。新道は砺倉分岐までは比較的楽に刈払いできそうであるが、その先のクラコシ尾根を歩きやすくするには時間がかかるかも知れない。

今までの春の小屋作業では多彩な山菜料理が印象に残っているが、今回は黒崎シェフの献立がすばらしかった。みんなを唸らせた特製カレーに、野菜炒めとサラダとスープのついた夕食は、山小屋での食事とは思えない豪華さであった。そして今回は何といても現役生が多く参加してくれたことが一番で、OBといろいろな話ができて、一緒に小屋に泊り高三郎山へ上ることができて満足そうであった。今後の小屋作業について、7月にOB役員と現役との意見交換会があり参加したが、その席でも前向きな意見を多く聞かされ、現役との合同の小屋作業が期待できそうに感じた。ぜひ、少しでも多く参加して、OBから作業のことだけでなく山歩きの経験談などを聞いて、今後に役立ててもらえたらと期待している。



(集合写真は長岡さん撮影)

ワンゲルのふるさとを訪ねて

57期 池田 勇馬

今回、春の小屋作業および高三郎山登山に参加させていただいた現役生を代表して、感想を書か

せていただきます。拙い文章ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。

〈活動内容〉

1日目は6時30分に出発し、OBの方々の車でダムまで行きました。そこからは手配していただいたボートで上流へと上り、倉谷集落跡を通過して9時ごろにベルグハイムに到着しました。現役生のほとんどが来たことのない立派な小屋を目の当たりにして、一同感動したことを覚えています。そこからは水場の整備、屋根の修繕、登山道の整備、草刈など様々な作業を行いました。普段山を登るだけの自分たちにとって、山を整備する立場になることで、新しい視点から登山の楽しみを見つけることができました。そして印象的だったことは、OBの方々がまるで現役生のように楽しく生き生きと作業をされている姿でした。世代が離れていても、共通して皆さん本当に山が好きなのだと思います。OBの方々と話しているとき、高三郎山の話になり、当初OBの方々で行かれる予定でしたが、現役生も興味を示し、参加させていただくことになりました。

夕食は黒崎さんが用意して下さったカレーをいただきました。今まで山で食べた料理の中で一番美味しく、とても感動しました。その晩はOBの方々から昔のお話をたくさんお伺いすることが出来ました。

2日目は高三郎山に登山をする組と引き続き小屋作業をする組とに分かれて行動しました。僕たち高三郎山登山組(長岡さん、上馬さん、現役生7人)は3時半に起床し、昨晚用意して下さったサンドイッチと黒崎さんが作って下さったコーヒーをいただき、4時半に出発しました。かつての精錬所跡を通り抜け、4時50分に新道登山口に到着、登山を開始しました。急峻な足場でしたがロープが整備されており、安全に登ることができました。OBの方々はかつてのトレーニングにキスリングを背負いながら登っていたという話を聞いて驚愕しました。始めの急登が終わるとしばらくはなだらかな道が続き、そこでは動植物に詳しい上馬さんがたくさんの知識を教えてくださいました。6時50分に砺倉に到着し、ここからはクラコシ尾根と呼ばれる、手入れがほとんどされていないブッシュの中を進むこととなりました。両側

が深く切れ込んでおり、かつ足場が見づらいため歩くのが大変でしたが、9時40分無事に高三郎山山頂に到着しました。かつてのワンゲルが登っていた山に現役生として登ることができ、とても感慨深かったです。

下山の際、上馬さんと長岡さんが相談した結果、来た道とは別のルート(旧道)に行くこととなりました。しかし、旧道の荒廃が想像以上で、何度も道迷いを繰り返してタイムロスをしてしまいました。12時すぎごろに現役生の立花が足の不調を訴え、予定していた下山時刻である13時に間に合わないと判断した結果、上馬さんと僕の二人が伝令として先に下山を開始しました。しかし、先ほどと同様に道がほとんど分からず、何度もルートを見失いました。登山経験の浅い自分にとってこのような経験は初めてで、不安と恐怖で何もすることができませんでした。上馬さんがルートを発見して下さり、15時に伝令組は下山することができました。後続組も約30分後に無事下山することができ、メンバー全員がケガなく帰ってくることができました。麓で待ってくださっていたOBの皆さんに合流し、18時に解散しました。

今回の活動では、高三郎山登山は事前に計画されていなかった登山だったため、万が一事故があった場合に学校で決められている課外活動の規則に反するおそれがあり、現役生の意識が甘かったことを反省します。これからの活動は事前にしっかりと計画をはっきりさせて、より安全で楽しい登山ができるようにするための教訓したいと思います。

個人的な感想としまして、今回高三郎山で大変な思いをしましたが、そのおかげで、夏合宿のリーダーをした時に常に的確な判断を下すことができるようになったと感じました。メンバーの安全や行動の把握などをしっかりと意識することで、無事に合宿を終えることができました。大変な思いをした分、自分の中ではとても貴重な経験になったと思います。まだまだ未熟な現役生ではありますが、これからもOBの皆さまと活動させていただき、たくさんのことを学んでいきたいと思っています。この度は本当にありがとうございました。

近畿支部活動報告

11期 加藤 忠好

1. H25 サンマパーティー

- ・実施日 2013/10/19(土)～20(日)
- ・場 所 大久保雑草園
- ・参加者 (19名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、小川⑥、藤井N⑩、高田⑩、畔山§⑪、
片田⑪、加藤§⑪、森川⑪、赤地K⑫、上馬⑬、
宇野§⑮、金井⑮、高村⑮、間所§⑮、三宅⑮
- ・パーティ報告

1泊2日で3,000円の会費、今や贅沢といえる炭火焼のパーティ、しかもいつも釣り銭がくるには仕掛けがある。サンマは明石で加工した逸品でいつも金井さんが寄付してくれる。そして、小川さんが寄付してくれる松茸、その他、参加者がいろんなものを差し入れてくれるからである。



下戸代表の小川さんの音頭で乾杯もいつものながら楽しい。自己申請1杯200円の生ビールを飲みながら、炭火焼を楽しみ、腹が膨れてきた頃に畳の上でお茶会、赤地さんによるやや怪しげな中国語的講座、プロジェクターを使った畔山さん作成のDVDで近畿支部活動を振り返り、次いで個人山行き報告。10年も飽きずつづいて来たパーティ。いつも同じだが、いつも楽しい。

サンマパーティーがうまく実施されるのは、仲がよい女性の力が大きからといえる。なにせ、今や女子会なるものを結成し、この年の暮れには京都南座の顔見世公演(歌舞伎)にも出かけるほどである。



2. 大分水嶺(五大山)に行くPw

- ・実施日 2013/11/16(土)
- ・コース JR篠山口=(車)=駐車場
～(長尾四十八滝コース)
～分水嶺の稜線(鉄塔)(～愛宕山往復)
～五大山～白毫寺分岐～駐車場=JR篠山口



- ・参加者 (15名) <§ : 夫婦で参加>
金岩⑤、小川⑥、伊豫K⑧、伊豫A⑩、
高田⑩、藤井§⑩、畔山§⑪、加藤§⑪、
高村⑮、間所§⑮、三宅⑮

・報 告

過去2年間雨天中止となった五大山Pw、今年は晴天での実施となった。

上りルートは長尾四十八滝コース、谷筋の急坂を喘ぎあえぎ登った。細尾根の稜線は日本海と太平洋を隔てる大分水嶺である。愛宕山まで行き、そこでの長い昼食。稜線を引き返し五大山で小川さん持参の水羊羹と展望を楽しみ、やや遅い紅葉の稜線を転がるように下山した。堅い地層のためこのような急斜面でもよく持ちこたえているのだろう。



公園の東屋につき、やっと緊張が解けた。各自が持参し食べきれなかった菓子がザックから出てきた。コーヒを沸かし消化に努める。うまい。その後、篠山口駅で一応の解散だったが、ほとん

どがオプションのこんだ薬師の湯に入っただけの解散となった。

3. 甲山鍋Pw

- ・実施日 2013/12/22(日)
- ・コース 阪急・甲陽園駅～甲山キャンプ場
～関学前～阪急・仁川駅
- ・参加者 (22名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、小川⑥、伊豫K⑧、篠島⑧、伊豫A⑩、
島林⑩、高田⑩、藤井§⑩、畔山§⑪、
加藤§⑪、森川⑪、赤地K⑫、楠屋⑭、
宇野§⑮、高村⑮、間所§⑮、三宅⑮



・報告

山鍋の問題は場所である。ほろ酔い気分で終了するので、車は使えない。道具も食材も公共交通機関での運搬となる。最近屋外での火器使用もうるさくなってきた。この時期キャンプ場も閉鎖しているところが多い。ようやく見つけたのが、甲山森林公園内のキャンプ場。カマドも大鍋もあるようだ。

集合地は阪急電車の甲陽園となった。このあたりでは異様とも思われる大きなザックで12月の車道を歩く。登り坂では汗が流れる。森林公園に着き、キャンプの手続を終える。この時期では我々だけのよう。



女性達がサンタエプロンを着けると一気にクリスマス気分が盛り上がった。水道やテーブルも完備、東に鍋が完成したと聞けば、そちらへ移動、西にうまい酒が開栓されたらと聞けば、そちらへ移動といった具合。鍋も4種類作った。特に水の代

わりにワインを使う下戸鍋が人気。揮散するアルコール分を無駄なく吸い込む人もいた。ほぼ全員が阪急仁川駅まで歩いた。その後11期以下全員が、銭湯激戦区の天然温泉に入り解散した。

4. 生駒山Pw

- ・実施日 2014/1/25(土)
- ・コース 生駒駅～生駒聖天さん～生駒山頂
～展望台(昼食)～生駒山麓公園
=(バス)=生駒駅
- ・参加者 (14名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、高田⑩、畔山§⑪、加藤T⑪、
森川⑪、赤地K⑫、赤地K⑭、上馬⑮、
金井⑮、高村⑮、間所§⑮、三宅⑮



・報告

生駒聖天さんの正式名は生駒山宝山寺。なんにでもご利益がある。それだけに人気が高い。ロープウェイも完備している。しかも複線というのは日本ではここだけだろう。

近鉄生駒駅に集合。しかし、登りは一切歩きである。一汗かいて宝山寺に到着。境内をガイドの方に説明してもらった。また、1月に意識を失った小川さんの回復を祈願する。さらに頂上までロープウェイがあるが、それを横目に二汗をかき頂上へ。ここで金井さんと合流し、赤地さんの案内で展望台まで歩く。好天、展望台では大和三山、金剛山・葛城山が雲海に浮かぶ珍しい姿で眺められた。ここで昼食。実に気分爽快だ。



頂上まで戻り、1等三角点を確認するも、頂上

はまさに遊園地。しかし北東に回りこむと綺麗に整備された山道であった。山中の温泉でのんびりし、バスで生駒駅に帰着。

オプションは大阪日本橋の中華店。孫の誕生で子守りから解放された加藤Sさんが山科から駆けつけ、一気に雰囲気盛り上がった。

5. 田中山Pw

- ・実施日 2014/2/22(土)
- ・コース 野洲駅～行事神社～出世不動明王～東光寺不動山～峠～田中山～福林寺磨崖仏～銅鐸博物館
＝(近江バス)＝野洲
- ・参加者 (9名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫K⑧、篠島⑧、伊豫A⑩、高田⑩、藤井N⑩、加藤T⑪、間所§⑮



・報告

変凡な名前の田中山であるが、ここは日本最大の銅鐸の出土地であり、また近江富士の良き展望台である。また、近畿の特権は、古い時代の歴史探訪の山行きができることだ。

野洲駅から、まず行事神社を訪れた。ここには注連縄の原型と思われる独特の形の勧請縄が掛けられている。村に悪霊や疫病などが入ってこないようにとの守りである。

出世不動明王から山道に入るが、すでに展望が開けている。稜線は岩まじりの裸地でミニ北アルプス気分です。田中山まで歩き昼食。下山後、福林寺磨崖仏を見物。花崗岩に彫られた素朴な仏像であるが、多くが削り取られて随所の庭園に持っていかれたとか。



さらに、銅鐸博物館へ。このあたり一帯で多くの銅鐸が出土したようである。途中、女性たちの喚声が聞こえた。庭になっていたレモンを褒めたら、住民がそれをくれたという。ただでは歩かない熟女たちである。銅鐸博物館では、鈴ぐらいに思っていた銅鐸が意外と大きいので驚いた。

6. 京都東山トレイルPw

- ・実施日 2014/3/15(土)
- ・コース JR 稲荷駅～伏見稲荷本殿～奥の院～四つ辻～泉涌寺～今熊野観音寺～烏戸野陵～清水山～東山頂上公園～円山～八坂神社～四条大橋
- ・参加者 (15名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫K⑧、島林⑩、高田⑩、藤井N⑩、加藤§⑪、森川⑪、楠屋⑭、宇野K⑮、金井⑮、高村⑮、間所§⑮、三宅⑮



・報告

伏見稲荷は全国の稲荷社の総本社、赤の鳥居がいたるところに建っている。また、随所に色々ないわれがあり、実に面白い神社でもある。今回は、ここより京都東山36峰の南部の峰々に沿って北上した。皇室の御寺・泉涌寺を過ぎ、今熊野観音寺でボケ封じを祈った。烏戸野陵で昼食。東山の南部一帯は古では京の埋葬地帯、不気味といえど不気味だが、今ではちょっとした観光地である。



清水山の登山口からはちょっとした山登り、東山の山頂では早い桜が咲き、メジロが花をついばんでいた。眼下の京の街は春霞の中でぼんやりとしていた。

丸山公園まで下るとさすがに観光客があふれていた。八坂神社を過ぎ、四条大橋で解散したが、三宅さんの案内で京極スタンドという居酒屋へ直行した。ここは、昭和初期の雰囲気が残っている店で、古さを大切に京都の文化に触れた気がした。

7. 高槻・大閘道Pw

・実施予定日 2014/4/5(土) 雨天中止

8. 琵琶湖沖島Pw

・実施日 2014/5/17(土)

・コース JR近江八幡駅＝(バス)
＝堀切港・(船)・沖島漁港～登山口
～尾山(見はらし広場)～尾山登山口
～(弁財天)～沖島小学校～沖島港
……堀切港＝JR近江八幡駅

・参加者 (16名) <§:夫婦で参加>
伊豫K⑧、島林⑩、高田⑩、藤井§⑩、
畔山§⑪、加藤§⑪、楠屋⑭、
宇野§⑮、金井⑮、間所§⑮、三宅⑮



・報告

淡水湖の島に集落があるというのは世界的に珍しいようだ。その珍しい島が琵琶湖の沖島である。主要な産業が漁業というから、さらに驚かされる。事実、島に渡ると港の風情がまさに漁村。港には漁船が繫留されているし、集落の狭い路地と家々のたたずまいから、淡水であるはずの湖面がどうしても海水だと錯覚してしまう。

山の標高220mといっても湖面の標高からは高々140mぐらいである。ここに我々がザックを担いで登るので、村の人たちからは非常に奇異に見えることだろう。

快晴、視程すこぶる良し。木々が360°の展望

を遮るのが惜しい。対岸の比良山を眺めながらの昼食は実にうまい。コーヒーとともにいただく羊羹の大中小も、また然りである。

ここでは時間がゆったりと流れているような気がした。小学校も二十四の瞳に出てくるような島の分校にも思えた。



この特産は、淡水魚の佃煮。船待ちまでの時間、店を覗いたり、ビールを飲んだり、あちこちを歩いた。巖島神社や沖津島などの海と関係の深い神社があるのが、この島の特徴であろう。

一旦、近江八幡駅で解散したが、ここを知り尽くしている間所さんの案内で某居酒屋に寄り、この日の楽しさを反芻した。

9. 六甲山上Pw

・実施日 2014/6/14(土)

・コース

(前半) 共通行動>六甲ケーブル山上駅
～神戸GC～みよし観音～仰臥岩
～心経岩～オルゴール館
(後半) 山上漫遊P>～高山植物園散策
＝(山上バス)＝山上駅
歴史探訪P>～記念碑台
～(シュラインロード)～古寺山
～多聞寺～神鉄六甲

・参加者 (14名) <§:夫婦で参加>
山上漫遊P>島林⑩、畔山§⑪、
加藤S⑪、間所§⑮、三宅⑮
歴史探訪P>金岩⑤、伊豫K⑧、黒崎⑧、
伊豫A⑩、加藤T⑪、楠屋⑭、上馬⑮



・報告

6月は、雨天中止となる公算が大なので、手軽に六甲山上の散策とした。幸いにして天気は晴れ、しかも涼しい。前半は、六甲山が信仰の山であった頃の遺跡を巡った。雲ヶ岩、磐座などは余り知られていない。昼食は般若心経を彫った大岩の前で食べた。オルゴール館まで全員同行し2つのパーティに別れた。



山上漫遊Pは、オルゴール館、高山植物園をのんびりと巡り下山した。

歴史探訪Pは、シュラインロードを下り古寺山に登り、多聞寺まで福原京時代を偲んで歩いた。

10. H26 サンマパーティ

- ・実施日 2014/10/19(日)～20(月)
- ・場 所 いよやかな郷 (大阪岸和田市)
- ・参加者 (19名) <§: 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫K⑧、篠島⑧、島林⑩、藤井N⑩、
畔山§⑪、加藤§⑪、森川⑪、赤地K⑫、
野村⑫、赤地K⑭、楠屋⑭、上馬⑮、
宇野K⑮、金井⑮、高村⑮、三宅⑮



・パーティ報告

これまでの雑草園を飛び出しての初の企画、ログハウスを5棟借り切ったの実施となった。天気は晴れ、チェックインは14時、運営委員を含めその時刻までに13名が集まった。荷物、食材を駐車場から運び出した。

しばらくすると、14期の赤地、楠屋の両女史が葛城山から下山してきた。健脚の二人である。残りも集合時刻には辿りついた。

さて、食事の準備、何しろログハウス周辺では火器が使えないというのだからやや不便。河原に近いところでサンマを焼き、芋煮、おでんを作った。

第1部 夕食

「桃果の荘」のテラスで何とか19名座れた。例年の炭火焼は無理なので、鍋を中心にしたが、それはそれで、うまい。日暮れまでという時間制限はあるが、良く食い、良く飲んだ。

第2部 お茶会

「紅葉の荘」で胡坐流、山鹿流の両宗匠が準備。相変わらずいろんな菓子がある。全員円く座わってお茶をいただいた。



第3部 活動報告

「蜜柑の荘」にパソコンをセットしたので、今度はそちらに移動。畔山さん制作の近畿支部のあゆみを上映、各人の山行き報告、だんだん国際色豊かになってきているようだ。

第4部 入浴・自由時間

夜も更けて来たので、本館の温泉に行く。宿泊者は24時までOKとのこと、今度の参考にしたい。今回は、各棟の2Fにベットがあるので、眠りたい人は何時でも気兼ねなしに眠ることができ、起きてしゃべりたい人はいつまでも話せる状況であった。が、みんな意外と早く眠りに着いたようだった。

第5部 朝食、後片付け

朝食はバイキング。後片付けも意外と早く終了し、11時前に現地で解散した。新しい企画には反省点があるが、初めてにしては上々であった。



東海支部活動報告

16期 川端 俊朗

平成24年4月に同会が発足し、早いもので、もう3年半が経ちました。その間、年平均3~4回程度のPW、夏の暑気払い・冬の忘年会の2回の懇親会を行ってきました。PWや懇親会の参加者も10名前後と、少ないながらもほぼ固定化してきました。これも、坪井事務局長はじめ、PWを提案してくれる小島君、竹本君などの努力によるところが大きいと感謝しております。ただ、この支部も同じだと思いますが、若いOB諸氏の参加が少ないのが残念です。

そんな中、今年度は7月のカムチャッカPWへの参加、10月の関東支部との合同PW(山伏PW)の試行など、新しい展開が見えてきたことも楽しみです。

来年度に向けての展望として、下記のような活動を皆で話し合い、取り組んでみたいと思っています。

- ① 今までのPWはすべて日帰りだったので、宿泊(小屋泊まりor温泉)PWを行うこと。
- ② 自然と歴史をめぐるPW
- ③ 関東・関西支部との合同PW

今迄は近隣の山ばかり登ってきましたが、今年、東山道を歩いて、奈良時代以前にこんなすごい道が日本中に張り巡らされていたことを知り驚きました。東海支部OBの中には、歴史に詳しいメンバーもたくさんいることと思います。誰もが参加しやすい、興味深いPWをこれからも行っていきたくと思っています。東海4県に在住のOB諸氏のご提案とご参加をお願いいたします。

私事ながら、小生も後2年で職を離れ、晴れて自由の身になれる。(そのはずです) その時まで気力・体力が衰えないよう、休日には名古屋の東山一万歩コースを歩き、ゴルフではカート乗車を拒否し、足腰鍛錬に精進いたしております。各支部のやたら元気な70歳台先輩についていくためにも。

以下、今年度PWについてご報告いたします。

東海支部 百々ヶ峰(どどがみね)PW

17期 渡邊 和文

日程:2014年4月12日(土)

参加者:竹本(21期)、森島(4期)、佐野(15期)、渡邊(17期)

百々ヶ峰は岐阜城のある金華山と長良川を挟んで北東に位置する標高418mの山。

北側には「ながら川ふれあいの森」があり、キャンプや散策を楽しめる。地形図にはない道もいろいろあるようだ。

8時過ぎ、JR岐阜駅前バス停に集合。

8:23発 三輪積廻行きのバスに乗車。岐阜市街を北に向かい、金華山を右手に見て長良川を渡る。右岸堤防を進むと、およそ30分で長良川千鳥橋近くの古津(ふるつ)に到着。

イチゴが赤く熟すビニールハウスの横の東海自然歩道を歩く。朝採りのイチゴを求める人の列ができています。出発したばかりなので買って食べたい気持ちを抑えて先に進む。途中、桜の咲く一洞山観音寺に参拝し、PWの無事を祈願。

道は長良川河畔の標高250m程の山に向かって登る。森島さんは日頃のウォーキング協会での活動によるものと拝察される“話をしながらの快調な足どり”。

稜線に登ったところで、長良川を見下ろし、金華山を眺めて暫し休憩。そして、山桜、つつじの咲く道を松尾池に向かって一旦下る。せつかく稼いだ高さが残念。松尾池で鯉を眺めて小休止。

沢沿いをしばらく進むと落差数mの萩の滝が現れる。引き続き沢沿いの登り道を喘いで登ると、稜線の白山展望地に着く。御嶽山、乗鞍岳、遠く白山?の眺望を楽しむ。



(白山展望地の標識があり、その先に真っ白い山なので白山に違いないでしょう。)

権現山を経て、百々ヶ峰(東峰)頂上に正午着。昼食休憩。大勢の人々で賑わう。



渡邊・竹本・佐野・森島

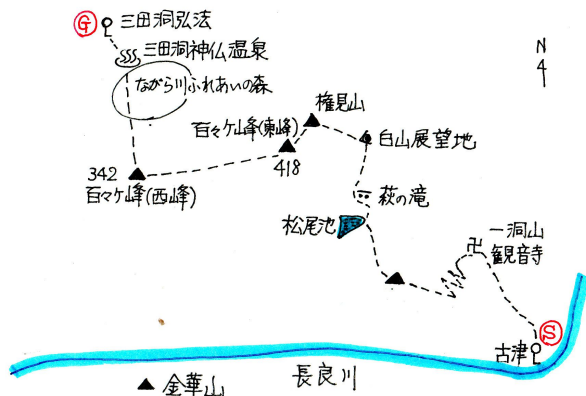
北方に能郷白山をはじめとする美濃の山々が眺められ、展望台からは濃尾平野、養老、鈴鹿の山並みが見渡せた。

稜線を西峰に向かい、西峰から北に延びる尾根道を「ながら川ふれあいの森」に向けて下る。14時に三田洞神仏温泉到着。地元と思しき方々とゆったりと入浴。



百々ヶ峰・三田洞神仏温泉

温泉近くの三田洞弘法バス停からバスでJR岐阜駅に向かう。15時30分、解散。雪山の遠望、山桜、温泉を楽しんだPWでした。



百々ヶ峰PW概念図

東海支部は、梅雨の晴れ間に、新緑と眺望が楽しめる古道歩きに出かけました。

1) 古代東山道って、どんな古道？

701年に大宝律令が完成して中央集権的な政治が進められ、都から地方へ七つの官道が整備されました。その一つが東山道(とうざんどう)です。東山道は、東日本中央部を貫く全長1000kmの官道でした。近江から東へ不破関を通過し、可児、土岐、坂本に至り、ここから①神坂峠(みさかとうげ)を越えて信濃国にはいり、園原(そのはら)を経て阿智に辿り着きます。伊那谷を北上して松本平にはいり②保福寺峠を越え、上田、碓氷峠を過ぎて上野国に出て下野国へ進んだ後、北に方向を転じて陸奥国、出羽国に至る長大な幹線道路です。特に木曾谷と伊那谷を結ぶ神坂峠越えは難所中の難所と呼ばれ、古くから知られていました。16世紀半ば以降、北を通る清内路峠越えが主要路となり、神坂峠越えの道は廃れていきます。

古代の神話や物語にも、神坂峠周辺の地名が登場しています。神坂峠は日本武尊が東征(日本書記)で越え、また、多くの東国の防人たちが通っています。万葉集、凌雲集、枕草子、源氏物語、今昔物語、新古今和歌集などにも、「神坂峠」や信州側の「ははき木」、「園原」集落が歌われています。源氏物語の「帚木の巻」で光源氏が空蝉に贈った歌で取り上げられた「ははき木」(ヒノキ)は、今も神坂神社東方の森の中で、根元近くの部分が残っているのを見ることができます。

2) 『古代東山道に行く』PW

日程: 2014年5月31日(土曜)

コース: JR中央線・春日井駅集合。自家用車2台に分乗。中央自動車道経由、園原IC⇒神坂神社⇒萬岳荘⇒富士見台高原⇒萬岳荘⇒神坂神社⇒昼神温泉⇒園原IC⇒解散。

参加者: 川端(16期)、吉田(17期)、渡邊(17期)、小島(17期)、坪井(24期)

今回のPWでは①神坂峠の信州側を歩きました。恵那山トンネルを抜けた園原ICで下り、園

原集落の西外れにある神坂神社前に車を停めました。神坂神社に祭られているのは三柱の海神（表筒命、中筒命、底筒命）です。こんな山奥にどうして海の神が祭られているのか不思議です。境内には樹齢2000年と言われる杉の大木や、日本武尊が東征時に腰かけたといわれる石があります。神社の横からすぐ登山道（古代東山道）が始まります。良く踏まれ歩きやすい道で、往時の「難所中の難所」の名残はありませんでした。園原川のせせらぎを足元に、新緑の美しいブナ林の中を登りました。やがてカラマツ林へと変わり稜線を歩くようになりました。しばらくして萬岳荘（ばんがくそう）に到着。この山荘は深田久弥が恵那山登山時に泊まった宿として有名です。

萬岳荘から西へ林道を15分歩くと神坂峠ですが今回は寄らず、富士見台高原（1739m）を目指しました。伸びやかな笹原の中の登山道を北へ20分ほど進むと頂上に着きました。ここで昼食。風がさわやか。北には中央アルプス、南には恵那山が見えました。東には南アルプスの連山が見渡せるはずが、雲に遮られてよく分かりませんでした。「富士見台高原」と呼ばれていますが、何故か晴れていてもここから富士山は見えません。「富士が見たい」が転じて「富士見台」と呼ばれるようになったという、にわかには信じられないような説もあります。頂上には、そのはらロープウェイに乗ってやってきたハイキング組もたくさんいました。お揃いの麦わらで作った山高帽の美人山ガール4人組がとても気になりましたが、声をかける勇気もなく、後ろ髪を引かれる思いで、来た道を引き返しました。（正面右：恵那山）

今回のメンバーは寡黙な男5人組なので黙々と登り黙々と下りました。その結果、コースタイム5時間20分（登り3時間&下り2時間20分）を、3時間20分（登り2時間3ピッチ、下り1時間20分2ピッチ）で歩いてしまいました。

坪井君曰く「下りの2ピッチ目（高度差350m急勾配の道）を30分余りで下るとするのは、現役時代よりも早かった」とのことで、さすがにこれはまずい。これからは、もう少しゆっくり歩こうよ、ということになりました。

我々は、下山後、阿智村にある日帰り入浴施設「湯ったり～な昼神」に直行し、山の汗を流しました。昼神温泉は、1973年、国鉄の新線（中津川

線）建設のボーリング調査中に発見されました。飯田線飯田駅と中央線中津川駅を結ぶ中津川線は、結局無期限凍結となったのですが、昼神温泉という思わぬプレゼントをもたらしてくれました。昼神温泉は今や南信州最大の温泉郷です。想像していた通りの良い湯でした。男ばかりだったので関係ないのですが、ここは「美人の湯」だそう。名古屋圏から車で1時間ですが、なかなか行く機会がなく、今回、PWで昼神温泉へ行って、みんな喜んでいました。「やっぱ山を下りたら温泉だね」としみじみ思った次第です。

3) W・ウェストンと古代東山道

日本アルプスの父と呼ばれるウォルター・ウェストン（1861年～1940年）は、徳本峠を越えて上高地から槍ヶ岳に登頂しただけではなく、何年かに分けて、中央アルプス、南アルプス、富士山など各地の山々を登っています。そして古代東山道も歩いています。

1893年、ウェストンは、中津川に泊まって恵那山を往復した後、古代東山道ルートを通り、岐阜県側から①神坂峠を越えています。

ウェストンはこう記しています。

「中津川から神坂峠（4975フィート）を越えて、中山道から伊那街道に移った。この峠は、恵那山の北の斜面にかかっているが、そこから天竜川の岸に出るまでの溪谷は、それまでに見たどの溪谷よりも美しかった。峠の東の高いところに小さな祠があって、二本の大きな杉に守られていたが、その一本は目通りで少なくとも26フィートの幹回りがあった。そこを過ぎると農家が点々と散らばっていて、〔中略〕不思議なことといえば、この辺の人たちは私たちにほとんど興味を示さなかった。〔中略〕あるお婆さんは、私たちが外国人だということを信用しなかった。世の中にそんなものがあるということすら聞いたことがないのだ。彼女にとっては日本だけが世界だった。」

〔W・ウェストン『日本アルプスの登山と探検』（岩波文庫 pp. 216-217）〕

文中の二本の大杉に守られた小さな祠は神坂神社で、外国人を見たことがないというお婆さんの住んでいた村は園原と思われます。当時の人たちですらあまり歩かなくなった古道を、一行が感嘆したり称賛したりして辿った様子が目に浮か

びます。

初めて上高地へ向かった1891年にも、ウェストンは、碓氷峠から②保福寺峠を経由する古代東山道ルートを取っています。この保福寺峠越えでは、かなり難渋しています。「午後1時をすこし過ぎたころ、私たちはジンリキシヤに揺られながら、上田盆地から保福寺峠を越えて西の松本へ通ずる道を進んでいた。〔中略〕浦野から先の道は永く手入れをしていないと見えて、路面が荒れ、雨水に抉られてひどい状態になっていた。ジンリキシヤは雨にうたれて露出した大きな石に乗りあげ乗りあげして行きなやむので、車夫をいたわるつもりで峠の峰まで歩くことにした。」〔同 pp. 30-31〕

ウェストンは何故、こんな苦労までして古道を通ったのでしょうか？山に登ることだけが目的であれば、できるだけ早く山麓に着ける一般的なルートを取ることができたはずです。

この『日本アルプスの登山と探検』は、ウェストンが英国人向けに書いた日本旅行のガイドブックです。山行の紹介に加え、巻末には装備、食糧等について一章を設けています。「最後に、重要な費用の問題にひとこと触れておかねばならない。外国人が頻繁に往来するありきたりの道を行かない方が、ずっと安上がりですむことは当然である。」〔同 p. 342〕と書かれています。当時（明治時代）、外国人旅行者の旅籠代等は日本人よりもかなり割高だったようです。ウェストンが古代東山道ルートを取ったのは、主要路よりも旅費が節約できたことが大きな理由だと思われます。ただ、日本の「登山と探検」を謳うウェストンにとっては、登山のことだけではなく道中の面白さも英国流ユーモアを交えて読者に伝えたかったが為に、あえて古道を歩いたのかもしれない。

以上



参加者

0期 田村、4期 佐藤、7期 村田、8期 野村、
9期 伊藤、10期 吉野、11期 上村、加藤、
12期 野村、13期 柴田、山西夫妻（旧姓 関）、
辰野、15期 上馬、舟田

ゲスト 飯田 植木

残念ながら来られなかった方

11期 青柳、12期 宮島、20期 松下、

以上、敬称略

今年のOBスキー合宿は終始異例の合宿となりました。

この合宿は平成10年3月21、22日に第1回を開催し、以降今回で17回目となります。スキー合宿の起源は、その前年の山小屋作業（山小屋酒場）で、冬にスキー合宿を出来たら良いですね、という一言から、田村さんが知っている野沢の民宿が有るから一度やってみようと言うことになり、舟田さんがOB会誌“やまざと”（その当時は夏号、冬号と年2回発行）で同志を募り、発足したと記憶しています。その後11期の青柳さんが幹事を引き受けてくださり、現在に至っています。

その由緒ある17回の中でも、今回は私の記憶にある限り最も特異な回でありました。

※その1. 予想外の大雪!!

・エピソード1. (20期 松下さんの場合)

彼は鎌倉在住。当日早朝玄関前には膝までの雪が。それでも気を引き締め荷物を持ってラッセルしながら北鎌倉の駅へ行ったそうです。ところが電車は不通。東海道線はまだ動いているとの情報で北鎌倉からJRの大船駅までラッセル。しかし、到着した時には東海道線も不通と分かり、この時点で断念したそうです。朝5時に家を出てからさんざん歩き回り、帰宅したのは午後4時頃だったそうです。彼のバイタリティーに脱帽です。

・エピソード2. (13期 柴田さんの場合)

彼は名古屋に住んでいます。昨年初めてスキー合宿に参加し、その楽しさに目覚め、今回も参加することにしました。彼の場合、名古屋からのスキーバスで参加するつもりでし

た。しかし、中央道が雪で不通のため乗車前に行くか止めるかの意志確認があったようです。それでも行きたいとの希望のもとバスは出発したそうです。結局バスは雪の少ない北陸道を経由し、夜の10時半から10時間かけて翌朝の8時半に到着しました。

皆に会いたい、滑りたいと言う執念に脱帽です。

その他、12期の宮島さんは野沢から割と近いのですが列車不通のため不参加となりました。

・エピソード3. (車の雪降ろし)

1晩泊まった2日目の夕食前、宿から車の屋根雪降ろしをするように案内がありました。何でも、これ以上積もって車がつぶれないように雪を降ろした方が良いとのこと。スコップを持って車の側まで行くと、屋根の上にはたった1日で1mを越す雪が積もっており、雪の降るなか一生懸命に除雪したのであります。それでも翌朝には更に30cm越えの積雪がありました。本当につぶれていたかも・・・。



(1mを越す積雪に悪戦苦闘)

※その2. 3日間吹雪かれっぱなし!!

今回、金沢組は初の金～日と2泊3日で例年より余裕を持って参加しました。(皆、定年を迎え時間が自由になったため?)ところが1日目は吹雪の中、昼食の待ち合わせ場所“湯の峰ロッジ”に逃げ込むように到着。昼食後雪が降る中を5本程度、震えながら滑って終了。

2日目は3班に分かれての滑走となったが、結局吹雪に負けて下の方の緩やかなゲレンデで滑って、早めの引き上げ。物足りないこと甚だしい状態となった。3日目は朝起きて外を見た段階で私は戦意喪失し、滑走断念。でも、意欲のある勇者は果敢にも吹雪の中、出陣して行きました。

この3日間で青空を見たのは3日目の帰り際のみという状況で疲労感は一段と増したのです。



(湯の峰ロッジに逃げ込んでホッと一息)

※その3. 田村さんどうなっちゃったの!!

今回の合宿は、大雪の一言に尽きるのですが、その話題を凌駕する出来事がありました。この合宿の発起人の一人である我らが田村御大がガールフレンドを伴って参加されたのであります。その方(Uさん)は、あの熱血漢の田村さんとは全然タイプの異なる、上品で穏やかで、お話を聞いても、こちらがほっこりする方なのです。寮歌祭でお会いになったそうですが、当の田村さんはこれまでになく穏やかで、大声も一切無く、おかげでほんわかとしたスキー合宿になりました。

ここまでの特異な状況を除けば、その他は例年通りというか、それ以上にスキー合宿らしいものであります。

まず、民宿“ふるさと”の食事はこれまで同様種類も多く、とてもおいしいものでした。1日目は馬刺し、オムレツを中心としたもの、2日目はそばのサラダ、鴨肉のソテー、天ぷら等の和洋折衷のどれをとっても美味しいもので、宿の心遣いが伺えるものばかりです。食事に関して気がついたのですが、野沢は1~2年前から外国人が一気に増え、この宿にも沢山の外国の方が泊まっています。でも、朝食時はテーブルでパンを食べているのですが、夕食には一人も居ないのです。夕食の付いていないツアーなのかもしれませんが、日本では考えられないパターンです。外国ではこれが普通なのでしょう。

食事とビールで堪能した後は部屋に戻り、恒例のスライド大会、茶会が始まります。今回は幹事の青柳さんが、お孫さんの誕生のため不参加でし

たが、これまで撮り集めてこられた野鳥のスナップを言付けられており、見事なスライドショーが展開されました。その他、上村さん(11期)の写真の人物をアニメにしたちょっと不思議な(?)スライドや芝田さん(11期 今回不参加)の学生時代のPW写真のスライドで皆さんの若かりし頃の容姿に話も盛り上がりました。

また、吉野さん(10期)のご夫妻でのアイルランド・エールでの自由旅行紀行(なんと旅行社は使わず個人で全て手配したとのこと)、舟田さん(15期)のネパールトレッキングのスライドとどれをとっても見応えのあるものばかりで、うらやましい反面自分ではとても無理という思いで鑑賞させていただきました。

今回もスキー合宿夜の部の締めは舟田さんの篠笛となりました。和服の熟女が奏でる篠笛は妖艶かつかき立てるものがあるはず(?)です…。確かに昨年の演奏からは率直に言ってかなりの上達ぶりで、来年の演奏が楽しみです。



(民宿“ふるさと”の前で)

ワンゲルを卒業してから数十年、体はだんだんと動かなくなってきましたが年に一度くらいはこうして先輩、後輩の区別無く、雪山に、アフターに集い、酒を酌み交わすのも良いものではありませんか。

KUWV OBの皆様、スキーをしない方でも日中は町中の13の外湯巡り(無料)、温泉街の土産物屋巡り、温泉まんじゅう、温泉卵、各種おやき、野沢菜、地酒、その他楽しいことはいくらかでもあります。夜はみんなと旧交を温め若かりし頃を懐かしむ。そんな非日常を味わうのもまた一興。是非とも参加されてはいかがでしょう。

『我、永久に緑なり』と口ずさみながら。

11期 KUWV一期一会の集い in 明治村

11期 加藤 忠好

「11期会の一文字ずらせば一期一会になる。」我々の中にも賢いものいるものだ。

卒業時の同期生22名というのは、当時では最大数を誇っていた。二人ぐらい結婚できない奴がいるだろうとのことで、20位組合なるものを結成した。結婚20位に多額の祝い金を贈ろうという一種の互助組織だ。そのこともあって、不思議と22名全員が結婚できた。その後、M子が30代で天国に行ったので、20位組合は自然消滅した。

11期については、賀状のやり取りや個人的に会ってはいるが一堂に会したことはない。



KUWVの45周年記念行事の時期に運動させれば参加しやすかろうとのことで、立山・雷鳥沢で開いたこともあった。10期 木津夫妻の他に11期では畔山夫妻、井上夫妻、森川、上村、向、青柳、加藤の9名が参加した。

次いで昨年は能登島で実施した。井上夫妻、北川、青柳、高田、芝田、上村の7名が参加、50周年記念式典の翌日、立山雷鳥沢へ井上夫妻、北川、上村、小山の5名が参加した。

11期も不確定の年齢、今度いつ会えるかわからない。5年毎では開催が億劫になる。よって、毎年実施とすることを決めた。

毎年実施の初年度となる今年、これまでの実質的な世話係りの井上夫妻を凸凹アドバイザーとし、土地鑑係・森川、連絡係・加藤、場所は明治村と決めた。勤務者もいるが、何かと小回りが利く日月開催とし、明治村近くの共済の宿を下見し、人数は不確定だが、約20名の参加予定とし7部屋を予約した。案内の結果、18名から返事が届いた。

10/25(土) 幹事会は森川邸集合、桑名の六華園や、木曾、長良、揖斐の三川合流の輪中地帯、薩摩堤などの名所を見物した。

10/26(日) 12時半、犬山遊園駅に畔山夫

妻、杉森夫妻、上村、向、森川、井上夫妻、加藤夫婦の11名が集合し、織田有楽斎ゆかりの有楽苑を超ゆっくりで楽しんだ。国宝・如庵以外にも色々な茶室があり、庭も良く整備されていて、見ごたえがあった。



犬山城に向かうと人の波。ちょうど甲冑祭りがあるとのこと。城の中も行列。天守閣に登り展望を楽しんだが、ベルトコンベアに乗っている如くで城を出た。歩いたのは距離にして約2kmなのに約3時間を要した。春日井在住の窪田氏に車で来てもらい、井上号、畔山号と窪田号の3台で宿に向かった。

宿で、片田、北川、長岡と合流、15名全員がそろった。風呂に入り、夕食を食べ、二間続きの20畳部屋で茶を点て、酒を酌み、あつという間に時間が過ぎた。22時過ぎに急用があるという杉森夫妻が帰っていった。



10/27(月) 朝食後、犬山城を見物するという長岡、北川と別れ、11名で明治村に向かった。10時始発の蒸気機関車に乗り、京都市電に乗り、まるで子供のようにはしゃいだ。品川燈台からは引き返すように歩いた。花子とアンの修和女学校の前をとおり、金沢ゆかりの場所、四高階段教室、無声堂でしばし学生時代を思い、金沢監獄の門、獄舎を覗き、帝国ホテルの喫茶室でゆったりとカツサンドを食べた。時間がいくらあっても足りないひと時だった。また会おう!!



参加者 上馬夫妻、宇野夫妻、奥名、金井、坂尻夫妻、鈴木夫妻、祖父江、佐野、高村、南保、舟田、増田、松下夫妻、松縄、松林、間所夫妻、三宅（以上 22 名）

ゲスト 8 期 篠島、11 期 加藤、森川

11 月 2 日 JR 元町駅集合 中華料理昼食 南京町散策 メリケン波止場散策 神戸港クルーズ シーパル須磨宿泊宴会

11 月 3 日 須磨浦公園 ロープウエー 須磨離宮公園 花離宮昼食 須磨寺 JR 須磨駅解散

以上

15 期フルメンバーを揃えた同期会が、無事終了しました。

舟田がなぜ報告者なのかというと、「筆が速い」ではなく、ビンゴゲームの特賞『神戸牛味噌漬け』（景品予算の 6 割を占めていた）をゲットしたためなのです。「副賞：会報レポート」などは添付されていませんでしたが、そうと解釈しないと、「罰が当たり」そう。

（そういう執筆経緯なので、先に送った「晩年？の山旅」原稿と重複する部分もあります。）

さて、神戸会場は 2 度目なのですが、調べてみると前回は平成 4 年 11 月。22 年ぶりの神戸です。間には、あの阪神淡路大震災もおきていたこととなります。

あの頃は、子供達までぞろぞろ同伴してきました。今回のように夫婦参加やシングル参加と、すっきりになったのは、もう子供達が独立しただけではなく、次々とジジババに進化させてくれたためです。

さらには、フルメンバーと評せるのも、南保さんが 24 年ぶりに参加・・・しかもウズベキスタンあたりから旅装のまま直行してくれたせいなのです（エレベーター内で、私達は髭面男が南保さんだと気付きませんでした。反対に、南保さんの側も私達に気づかなかった・・・それって、つまり??）。

いえいえ、それだけではありません。近況報告他で明らかになったところによると、手術をして

からまだ抜糸が済んでいない人（つまり脱走？）や、1 週間前に勤務先から救急車に乗せられていた人や、娘の婚礼の衣裳合わせを前日にずらしてもらった人や・・・がいました。

それぞれの奥様がおっしゃるには「15 期会だというだけで、旦那が車中からもニコニコしている」のだそうです。

実は、この前日の 11 月 1 日には、金大でホームカミングデイがありました。この機会に、化学科同窓会の同時開催もと、私は講座仲間と画策していました。ところがそちらは、準備の打診段階でもう反発され、ポシャってしまっていました。どなたも学卒か院卒の資格で就職されたのでしょうから、「道義上は（？）ワングル卒の肩書よりもお世話になった」と考えてもいいといえるでしょう。

でも、そんな道義は動員力にもならず、一方、ワングル同期会の方は、「這ってでも参加」のフェロモンを放つようです。

たしかに自分も、もしワングル時代というものがなかったら、大学時代はどう位置づけられるのだろうと考えると、埋めるものがありません。やはり、ワングルなしなど、想像だにできません。

ただ、卒業してから一度も集まったことのない期も多いと聞いています。

そして、ゲスト参加された篠島様からも「フル参加なんて凄い！是非、会報に紹介すべきだ。現役にも、部の付き合いは一生続くもので、大事な財産になると、伝えてやるべきだ」とのご意見を頂きました。

そうですね。ワングル時代を「あの頃はモラトリアムに過ぎない」と、過去の話にしてしまうのはもったいない。山でバカを言い合えた仲間、気配りやサポートをし合えた仲間というものは、いつまでも人生の伴走者だと思います。「喜びを分かちあい、悲しみを慰め」といいますが、そんな伴侶の他に、同期というクッションもあるありがたさ・・・ぼちぼちリタイアしていき、会社の絆があっさり切れてしまうのを思い知ると、なおのこと、生涯切れないものとして、その価値が身に染みてくるものようです。

そのためには、本当は卒業後もしばらくは仲間

育ての努力は必要です。

「努力」と思っていたわけではありませんが、ほうっておいても繋がるものではありません。相手方の知らない事情が増えていくと、声を掛けるのが億劫になっていくのが普通です。「今さら」とさらに距離が開いていくことになります。

しかし、仕事がつつくなり、それぞれに伴侶や子供ができた頃でも「恒例で集まる」を続ける。そうやって、卒業後の経験も一緒に重ねていくことで、生涯の仲間が育っていくのです。

もともと、数あるサークルから、ワングルを選んだことや、拘束行事の多い活動を4年間続けた点では、基本の価値観は相当に似ている方だといえます。卒業後かぶる波の大きさも、間合いも、似たようなもの……。

したがって、世話役を持ち回りにして、同期会を恒例化してしまえば、案外と「ずっと現在の形の仲間」を維持できるのではないかと思います。

と、ここまで模範解答を並べてきて、はたと筆が止まってしまいました。

15期が特別意志堅固で、濃厚な仲間付き合いがあり……だったわけではありません。

「なぜ、そんなに」と言われたら、悲しい悲しい過去がある……。社会に船出して早々から「会いたくても、会えない」目に遭ってしまったからなのです。

卒業後9年もしないうちに、高村栄一さんが風邪が元で他界しました。同期は泣きながら棺を運びだしました。命のあまりの重さと儚さを彼は教えていき、私達がトレーニングに通った卯辰山の墓地に永眠することになりました。

その訃報を「悪い知らせです」と電話してくれた宇野和子さんは、平成14年の北海道同期会のたった4か月後にスキルス癌で早逝。

その北海道同期会をJTBならではの早割を駆使して実現してくれた渡辺純久さんも肺癌で去りました。突然おでん屋から電話してきて「また会おうなあ」の言葉で別れたのが、実は別れの挨拶だったのだと判ったのは後日のこと。その間には満身創痍のように比田井忠篤さんが去り、横井昭次さんは子供達を助け、ボートに押し上げた後、木曾川に沈みました。

いつでも会えると思っているからご無沙汰で

も平気でいられるのです。いつ会えなくなるかわからない……が身にしみたからこそ「這ってでも」会おうの気になる……そういうことなのです。

15期も卒業後は、それぞれが地元へ、あるいは勤務先へとばらばらに散ってしまいました。それが不利にはならず、かえって「俺の所にはこんな安くていい宿泊場所がある、こんな観光地があって、こんな遊び方ができるぞ」と、とっておきプランで仲間を感心させる楽しみへ向いていきました。これも、ワングルでの立案の経験がものを言っているようです。

最初から、伴侶の参加大歓迎、家族連れ大歓迎でした。もっとも最初の頃は、「なんで、あんな陰気くさい、似たような唄ばかり歌っているのかしら？」と奥様達にあきれられてはおりました。最近では根気と、記憶が失せて、あまり唄の出番はありません。

子供が多い時には、子供の喜ぶ行先（水族館など）を探しました。子供を含めて参加者が50名を越えたこともありました。子供達は子供達で、親をさておきカラオケ大会を始めたり、「みかんおじさん」と格闘技を始めたり、深夜のエレベーター前で、賭けトランプをやっていたり、さらにはメール交換も始めたり、二代目らしくノっていました。そして「みかんおじさん」の横井さんは、その二代目達に、彼の編集した絵本や童話を個別に送ってくれたものでした。そんな子供達もすでに、私達がワングルを卒業した歳を越えて自分の家族をもちつつあります。

今年の宿は公営のため宴会時間が短く早く、「近況報告は短めに」と何度もお達しができましたが、どなたも話したいことがいっぱい。（そういう幹事からして、時間オーバー）

初孫にメロメロや、褒賞を受けたことや、絵が入選したこと、娘がミス百万石に選ばれたこと（本人は自分に似ていると力説しましたが、他は全員明らかに奥さん似と判定しました）や、ボランティアの事務局職についたこと、一人娘の結婚が決まったことや、はたまた、奥様に休日は出歩いてくれと牽制されていることや、肝臓移植待機の心配をしたこと、「不倫の経験あり」と言ってヤンキーの心を開いたとたん首になった話や、取

締役になったものの来月の給与の工面に奔走している話に、どうやら子供が稼業を継いでくれそうから、私達の代止まりかもまで。

そんなふうに、かつては自分の就職、結婚、子育ての話題、さらには次世代へと、子供の成長、就職、結婚、出産の諸経過が、毎回軽妙にサイクルが披露されています。

そう、人生はいろいろなのです。工学部、理学部、経済、法学、文学、教育、医学部と、いろいろな学部出身者がいたことも、その後の人生を多彩にしています。全てのことが一期一会といえるのですが、大学内であっても接点などありような人達と、ワングルならではこそ、知り合い、仲間になれたのです。

「よかったなあ」「お前も大変だなあ」が、嫌味も妬みもなく言えて、同じ船出をした仲間の共感が続いていく・・・幸せで、ありがたいことだと思います。

ここで一言。男性同士なら、出張ついでに「飲もうよ」の声掛けもやっているでしょうが、もともとが紅一点の私にはその手の楽しみはありません。

でも、仲間たちが結婚してからならではの楽しみは増えました。それはですね、奥様方から、仲間達が家庭でどんな夫であり、どの程度亭主関白ぶっているかを、女部屋でこっそり聞けることです。ウフッ・・・。そう、「仲間」と「夫」は、基本的には別物。総じて、よく気がつく分、小うるさい夫のようですよ。ではワングル育ちの妻の場合？ 大まか、ズボラ、無神経。(そうでなくっちゃ、紅一点をやってられるか!!)

今回は、日頃関西OB会で集まっている宇野、金井、高村、三宅、間所の諸氏が幹事で、何度も下見や、打ち合わせ（つまり飲み会）をしていていました。(特に、宇野あつ子様、めっきり動きの悪くなった、おじんおばん族のお世話をありがとうございました)

そして、来年の幹事は松縄さんに決まりました。「飲んでいて覚えがない」と言いつつ、「春日山、地引網、ハッピーマンデーに」と、もう一年後のプランニングをにこにこやっていました。

はっきり言って、「フル」を強調されると、道

長ではない私は、かえって「次は欠けるしかない」と、どちらかといえば不安になります。実際、親の介護や、自身が初体験していかねばならない体調不良やら、不本意なことの方が今後確実に増えていくと思われまます。

それでも、人生の坂を一緒に下っていく仲間がいるのは、とても心強いことです。

できれば、来年もいい報告ができるように、そうでない場合は、こぼして慰めてもらいに・・・。
やはり同期会を楽しみにしていきたいです。



メリケン波止場にて



シーパル須磨にて 宴会

17期の仲間達 in 小淵沢

17期 渡邊 和文

17期の仲間達が今年是小淵沢に集合。ペンションと柗座さんの別荘をベースに秋の八ヶ岳山麓や入笠山(にゅうがさやま)散策などを楽しみました。

日時：2014年10月11日(土)～13日(月)

参加者：大西(18期)・柗座(加地)・井上・小間・長田・大家・川村・恵比寿・藤野・杉本・吉田・渡邊・藤井・松岡・柗座(柗座さんのご主人)・小島

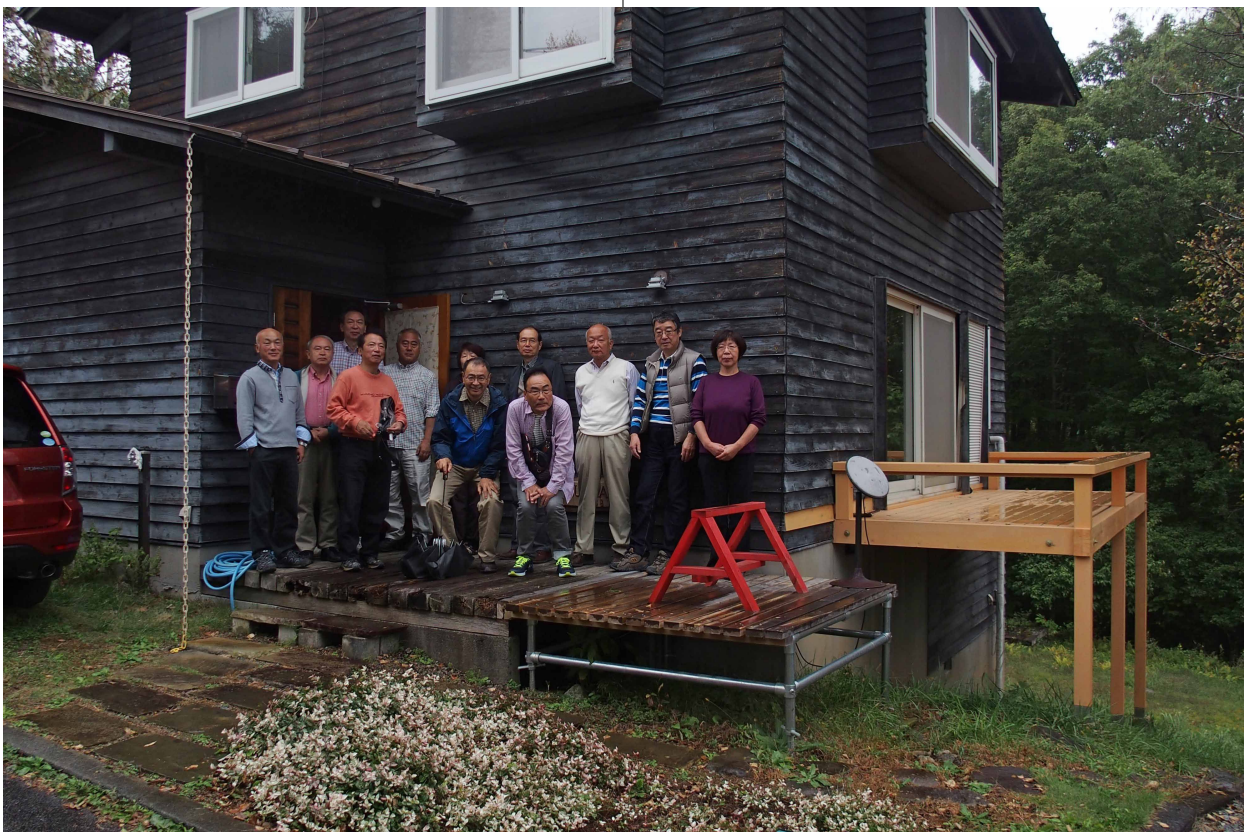


入笠山山頂にて

1日目好天。九州、関西、東海、北陸、関東に在住するメンバーはレンタカーやマイカー相乗り、JRなど思い思いの方法で小淵沢のペンションに集合。入浴後、夕食を楽しみながら自慢の娘や孫のこと、自身の健康などの近況を報告。恒例のミーティングはなぜか教師や教育の話で熱くなったが、現役時代のように徹夜とはならず就寝。

2日目曇天ながら眺望良し。今回は意欲的なメンバーのおかげで入笠山を目指す。ロープウェイで高度を稼ぎ、足どり軽やかにあるいは息を切らして頂上に向かう。途中、樹間から噴煙の上る御嶽山が見えて合掌。入笠山山頂からは360度の素晴らしい眺望を満喫。先に帰路に着く二人を富士見駅まで送る。昼食後、買い出しと観光組に分かれて行動。柗座邸で伊勢うどんなどの豪華夕食と酒盛りの後、久しぶりの雑魚寝で夢路を辿る。

3日目雨天。接近する台風を避けて早々に帰路に着く。今年も楽しく旧交を温めることが出来ました。来年は北陸新幹線絡みの企画で集まる予定です。



主将あいさつ

58期 梅田 雄大

この度、金沢大学ワンダーフォーゲル部の部長に就任した、58期の梅田雄大です。

この伝統あるワンダーフォーゲル部の部長に就任でき、光栄です。このうえは、部の発展に全身全霊を傾斜してまいる所存でございますので、よろしく願い申し上げます。

さて、現在部は、4回生13人、3回生14人、2回生14人、1回生13人、合計54人の部員で活動しています。今年の夏合宿は、北アルプスパパーティーが2つ、南アルプスパパーティー、北海道パーティー、東北パーティー、四国パーティーの6パーティーで行いました。

今夏は台風の影響もあり、天候に恵まれず苦しい夏合宿になりました。しかし、各パーティーのリーダーの冷静な対応によって、今年の夏合宿も遭難事故など発生することなく無事に終わることができました。パーティーのメンバーも、苦しい状況に屈することなく、夏合宿を乗り越えることができ、ひとつ成長することができました。下級生はこの経験を、自分のスキルの向上、来年入部する新入生への指導に活かし、来年の夏合宿の成功へとつなげていきます。

皆さま、ご存じのことと思いますが、先日、御嶽山にて噴火が発生しました。現役の部員には被害はありませんでした。ですが、去年御嶽山に登った部員もおり、我々にとって身近な存在である山で、あれだけの被害が出たことに驚くと同時に、山の上では何が起こるか分からないということに改めて感じました。

火山が爆発したら危ないということはもちろん知っていました。しかし、富士山のような噴火したら甚大な被害をもたらすような火山にも、ハイキング感覚で登っている人はたくさんいるように、私たちは自分たちが登っているときは、噴火は発生しないものだと思込んでいるようです。我々も、白山のような噴火が警戒されている山に、噴火する可能性を考えるとなく、頻繁に登っています。

噴火する可能性がある山を避けていたら、登れる山は限られてしまい、登山が楽しいもではなくなってしまいます。しかし、少しでも被害を小さ

くするための対策はあると思います。例えば、登山計画をたてる時に、小屋など、身を隠せる場所を把握しておくこと、また、メインザックのようなものを使い、噴石から身を守ることを想定しておくことなど、出来ることはたくさんあります。

ここまで火山について書きましたが、火山でない山でも同じことが言えます。山で危険な目にあわないためにも、普段から山の知識を身につけて、登山をより安全なものにしなければなりません。それを今回の御嶽山の事故で改めて痛感いたしました。

私は部長として、部員を守る責任があります。部員から犠牲者が出ないように、安全な登山ができるような環境を整えていき、部全体の登山スキルを向上させ、部を引っ張っていきます。

甚だ略儀ではありますが、これをもちましてご挨拶申し上げます。

雨の北アルプス

58期 坂本 沙紀

日 程 8月11日～18日

コース 折立→黒部五郎岳→三俣蓮華岳→水晶岳→鷲羽岳→槍ヶ岳→大天井岳→燕岳→常念岳→蝶ヶ岳→横尾

まっすぐに立ってられないほどの強い風、毎日続く雨、鳴りやまない雷……。

今年の夏合宿期間は、去年とは裏腹に悪天候が続きました。期待していた北アルプスの絶景もほぼ見ることができず、回復の兆しを見せない天気は何度も心が折れかけました。登山をしてきて初めて、「もう帰りたい。」と思いました。けれど、励ましてくれる先輩たちや、必死でついてきてくれる後輩たちのおかげでなんとか最後まで行程を終えることができました。

今まで経験したことがないぐらい壮絶な一週間でした。ですがその分充実して、達成感を感じた一週間でもありました。景色が良くなかった分、たまに見せてくれる絶景にいつも以上に魅了されました。辛い時間を一緒に乗り越えた分、パーティーメンバーのつながりも強くなったように感じました。特に6日目の出来事は印象的でした。

連日の風雨を乗り越え、やっと到着した常念小屋のテント場でのことです。これまでガスと雲で

真っ白だったのにもかかわらず、一瞬だけ晴れ間が見えたのです。テント場中から歓声が上がりました。雲がさっと引き、青空が広がり、隠れていた槍が顔を出したときは涙が出るくらい感動しました。一瞬の出来事でしたが、あの景色は一生忘れないと思います。

来年はいよいよ最後の夏合宿です。何が待っているかわからない一週間に、今からドキドキしています。今年は自分のことで精一杯で、後輩を気遣う余裕がありませんでした。来年はこの反省を生かして、頼りになる先輩を目指します。来年は晴れますように……。



↑燕岳山頂にて



↑常念小屋テント場にて



↑鷲羽岳山頂にて

僕は元々大学に入った時にスキー部か登山の部活に入ろうとしていた。だが、スキー部の練習が忙しそうで勉強やバイトがおろそかになりそうだったこと、さらに同じ学類で初めてできた友達に誘われたことで、僕はこの部活に入った。

最初にこの部活に入って思った感想は先輩が親切だということだった。

新歓の時、初めてザックを見たときは正直その大きさに驚いた。この時の一番の思い出は僕がその時通帳を実家に忘れてしまっており、GWに実家に帰るまでお金がおろせなかったため、米すら満足に食べられていなかった。それで、この卯辰山で先輩方にご馳走になったバーベキューにより腹を壊してしまい、結局、帰りは1人先輩の車で帰ることになってしまった。

入部して間もなくして、医王山に登った。最初の印象は、むしむししているということや、道がぬかるんでいたこと、さらには毛虫がとても多かったことなどだった。

その日の行動の後半に差し掛かった時、先輩にあれが鳶岩だと指さされた岩壁は、まさに絶壁だった。だから何なんだと思っていたら、今から登ると言われ恐怖を隠せなくなった。

登り始めても恐怖は高まるばかりであったが、前を登る先輩がとても頼もしく、常に自分をリードしてくれた。何とか登り切った時には、風が人生で一番というくらい気持ちよかった。卯辰山の時からそうだが、僕はこの半年間、やらかしてばかりだった。

例えば、第一回のトレーニング山行で僕は寝過ごししてしまい、結局、先輩に家まで起こしに来てもらった。入部早々多大な迷惑を掛けてしまった。更に、それだけに留まらずレインウェアを家に置いてきてしまった。出発の時間の最大待機を超えてしまった。すべてがすべて自分のせいだった。大罪にも程があった。もうあんな経験はしたくないと思った。

今から考えても最大待機を二時間も超えてしまうなんて本当にどうしようもないことだ。あの日山に登らせてもらったことに本当に感謝して

いる。大日山に登ったが、登り初めから既に急登と呼ぶに相応しい傾斜の道であった。それにしても、よく晴れており、景色も良かった。

ただ、最後の登りは本当に長くて辛かった。

3年の先輩方は歌などを歌っていて何事もなさそうに登っていた。すごい。避難小屋に到達する前に景色が開けた。とても安心した。避難小屋では、先輩から、差し入れのおいしいお菓子などを食べながら、大学の話などを聞いて、充実した時間を過ごした。翌朝には御来光が見られた。

第二回は白山に登った。二日通して大日山とは比べ物にならない距離だった。雪渓がまだ残っているところがあった。一日目の最後のアイゼンなしで登る雪渓は本当に辛かった。日本三名山だけあって周りの登山客の多さに驚いた。

8月に入り、まず立山に登った。前にも行ったことがあったが、登るのは初めてだった。上回生の方々がとても親切にしてくれ、とても楽しかった。稜線上から劔岳が見え、いつか行ってみたいという気に駆られた。

でも、ここでもやらかしてしまった。公金というお金を管理する役割を担っていたのだが、精算が合わず、皆さんに迷惑を掛けてしまったのだ。

ついに、夏合宿を迎えた。僕は北アルプスを縦走するパーティーに所属していた。その山行は、想像を絶するものだった。

1日目は、全体を通して一番楽なものだった。歩き終わった後に皆で差し入れて頂いたメロンを食べた。1日目のテント場、薬師峠キャンプ場には、何とゴミ箱があり、メロンを持ち歩く係だった僕にとっては、本当にありがたかった。メロンは先輩が冷やしてくれていたのでも、とても美味しく頂いた。あの気遣いには本当に感謝している。

2日目は、恐らく合宿の中で最も天気が悪かった。黒部五郎岳に登ったのだが、晴れていた時の山頂からの景色は最高だったと先輩から聞いていたので、とても残念だった。

とにかく雨も大概だったが、風が印象的だった。

3日目は、とても長い1日だった。まず、黒部川に沿って登り、三俣山荘を目指した。そこでメインザックを置いて、水晶岳を目指した。水晶小屋から山頂までの道のりは歩きづらい道で楽しかった。そこから鷲羽岳をめざした。

もうここで随分足にきていた。再び三俣山荘に戻り、メインザックをとって双六小屋のキャンプ場を目指した。

この時、荷物の整理に人一倍時間が掛かり、班員に非常に迷惑を掛けた。

テント場まで最後腰が痛く、耐えられなくなった僕は、先輩1人についてもらって先行し、班のみなさんより先に休まさせてもらった。

この日以降このようなことや故障が無く、迷惑を掛けずに済んだ。皆さん、とても疲れたご様子だったが、次の日からは、また元気な様子に戻っていた。

4日目は、1日目と同様、比較的楽な1日だった。ただ、槍ヶ岳山荘までの最後の急登が信じられないくらいきつかった。途中、何度も止まって休んだが、それでも一番早く着いた程のきつい急登だった。

山荘で一休みし、男子3人だけで、槍ヶ岳に登頂した。とてもテンションが上がった。この日のテント場は殺生ヒュッテのところだった。

夕方にトイレへ行ったら、帰る時には日が暮れてしまって、自分のテントが分からず、たいへんだった。次は、気をつけようと思った。

5日目は、大天井を目指した。この日も雨、風ともに激しく、リーダーの判断の下、山荘に泊まった。あいにく山頂からは何も見えなかった。山荘に入ってから、ただただその素晴らしさを実感するばかりであった。

ゼリーを食べたり、温かいカフェオレを飲んだりして、とても和んだ。

僕はそこで湊かなえの小説を読みふけた。半分ほど読んだ。その小説には、とても引き込まれるものがあった。

流石有名作家だと思った（僕は村上春樹のよさは全く理解できない）。

6日目は、初めからサブザックで燕岳を目指し

た。その道すがら雷鳥を2回も見ることができた。いつからか道が砂っぽく変わり、奇岩も沢山見ることができた。歩いているだけで、とても楽しかった。ただ、天気が悪かったせいで山頂にたっても全然それっぽい気分にはなれなかった。

燕山荘には、多くの親子がいたり、山荘の雰囲気がとてもよく、この先の人生一度は泊まってみたいと感じた。

大天荘に戻り、再びメインザックを背負い、常念小屋を目指した。道のりは思ったより長かった。そして、連日の雨でどでかい水溜りがいくつもあり、僕の靴下は犠牲になった。この道中、何度も僕の靴紐がほどけ、とても迷惑を掛けてしまった。

テント場では束の間の晴れ、一人の先輩は、久しぶりに見る太陽に涙を浮かべていた。ところが、すぐに暗雲が立ち込め、太陽は、すぐ見えなくなってしまった。

翌朝は、山頂で御来光を拝む為に2時半に起床

したが、常念岳の山頂は意外に遠く、日の出には間に合わなかった上、肝心な日は出ていなかった。

そこから付近に横尾に下る登山道のある分岐まで進んだ。

足は限界に近かった。雷が落ちていて、結局、蝶ヶ岳頂上まで行ったのは、僕と三年生の先輩二人の3人だった。その後、横尾へ下ったが、結構なスピードで下ったため、最後、先を行っていた班に追いついた。

8日目は、横尾から上高地へ進み、温泉に入ったり、ソフトクリームやおやきを食べたりした。

夏合宿通して、先輩方はテントの設営や雨具への着替え、メインザックからサブザックへの切り替えがすばやく、僕は常に遅くて迷惑を掛けた。

これまでの数々の失敗を含む経験を胸に留め、これからの山行に臨んでいきたい。



北緯 53 度の誘惑
～カムチャツカ PW に参加して

17 期 小島 敬

まず、このPWを企画された山中さんに感謝申し上げます。日本の近く（直行便で3時間半、香港より近い）にこんな素晴らしい山域があることも、ましてそこへ実際に行けることも全く知りませんでした。貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

登ったのはカムチャツカ半島の中心都市ペトロパブロスク・カムチャッキー郊外のアバチャ山（2741m）とバチェカズェツツ山（1566m）です。

標高は、白山（2702m）や高三郎山（1421m）とあまり変わりませんが、緯度が高い（北緯53度）のでバチェカズェツツ山ですらU字谷や圏谷があり、多種多様な高山植物が咲いていました。

〔注1〕

日本の高山植物は、日本固有種を除けば大半が氷河時代に南下してきた北方系の植物群とされています。その多くがシベリアや千島列島、カムチャツカ半島などに本拠地を持つ植物です。今回は、いわば日本の高山植物の故郷を訪ねる旅でもありました。以下は、天候にもメンバーにも、おまけにヒグマにも恵まれたカムチャツカPWのレポートです。

（I）PW概要

【名称】金沢大学ツァーフォーゲル部OB会・海外企画 カムチャツカ2つの名峰登頂と世界遺産の火山群展望フラワー・ハイキング9日間

【日程】2014年7月12日～20日

【行程】ペトロパブロスク・カムチャッキー⇒アバチャ山⇒バチェカズェツツ山⇒ペトロパブロスク・カムチャッキー

【難易度】体力3/3、高度1/3、技術2/3

【参加者11名（男性7名、女性4名）】

合津さん（6期）、高水間さん（8期）、山中さん（9期）、森川さん（11期）、野村さん（12期）、上馬さん（15期）、小島（17期）、山中さんのご親族やご友人4名〔OB会報の性格上、レポートでは「関西組」として表記〕

【ツアーリーダー（添乗員）】

アルパインツアーの小山さん。彼女にはワンゲ

ルOBが同社のツアーで何回かお世話になっており、山中さんご指名での添乗。状況変化への対応能力が高く、エンターテイナーでもあり、まさにツアーリーダーに適任。中高年をあしらす術も優れている。立教大学山岳部OG。

（II）カムチャツカ半島概要

水生昆虫のタガメのような形をした半島。面積は日本とほぼ同じ。人口は30万人、ヒグマは2万頭。アルパインツアーの事前説明会でカムチャツカの地図を受け取る。行動時間の割にはベースキャンプからアバチャ山までやけに近いと思ったら、なんと縮尺20万分の1だった。これ以上細かい地図はないとのこと。カムチャツカ半島は環太平洋火山帯に属し、300の火山と30の活火山がある世界有数の火山地帯だ。地震の多発地帯で建物には高度制限がある。主要な3つの都市が不凍港のアバチャ湾を取り囲んでいる。カムチャツカの中心都市であるペトロパブロスク・カムチャッキー、空港のあるエリゾヴォ、そして閉鎖行政区域のヴィリュチンク（ロシア海軍太平洋艦隊の原潜基地がある）。主要産業は漁業・水産加工業。寒冷地（7月でもペトロパブロスク・カムチャッキーの気温は東京の3月並み）の為、専業農家は成り立たない。郊外にダーチャ（市民農園）があり、人々は短い夏の間には自家用のジャガイモなどを作る。豊かな自然を活かした観光では、登山、トレッキング、スキー、狩猟、ラフティング、釣りなどが盛んだ。

〔注2〕

カムチャツカ半島が日本人に馴染みがないのは、観光地としての歴史が浅く関連する情報が少ないことによる。冷戦時代、極東の対アメリカ最前線であったカムチャツカは「閉鎖エリア」になっていた。ソ連崩壊後、ロシアの開放政策により外国人も訪れることができるようになった。我々がベースキャンプの移動に使ったのは、軍事車両から民生転用された六輪駆動の大型車だった。つくづく「観光業は平和産業」だと思う。最近の日本の富国強兵策を見るにつけ、日本でレジャー用の大型四輪駆動車が軍事転用される日が来ないよう、東アジアの平和が続くことを祈るばかりだ。

（III）カムチャツカPW旅日記

7月12日(1日目)

【成田⇒ウラジオストック】

せめてロシア語のイロハは身に着けようとポケットサイズのロシア語会話帳を買った。アルファベット(33のキリル文字)を覚え、ごく初歩的な単語を泥縄で暗記しているうちに成田空港に着いた。海外登山ツアーはこれが初体験。しかもメンバー全員が年長かつワングル大先輩。初めて夏合宿に参加する1年生のように、極度に緊張しつつ集合場所へ行く。全員集まったところでメンバーの簡単な自己紹介。OB同士も関西組もお互いよく知っているようで和気あいあいとした雰囲気だ。皆さんの話を聞いていると、国内はもちろん毎年のように海外の山へ出かけている人がいる。

「OB」なのに山の「現役」という大変なメンバー揃いだ。自己紹介の後、ツアーリーダーの小山さんから注意事項の説明が始まった。ところが誰も熱心に聞いていない。隣の人と話をしたり、関係ないメモを取ったりしている。これからカムチャツカへ行くというのに、このゆるさ加減は「町内会の温泉旅行」と同じではないか。それまでの張りつめた気持ちが一気にゆるんだ。これならやっていけそうだ。脱力したまま有馬温泉ならぬロシアのパラトゥンカ温泉めざし、シベリア航空に乗る。

ウラジオストック着。涼しい。空港近くのホテルにチェックイン。ホテルのレストランで夕食。温かなスープがありがたい。ウェイトレスの名札を何気なく見ると、エカテリーナとある。まさかロシア皇帝エカトリーナII世の末裔では。今は極東の鄙の地で女給に身をやつしてはいるが、これは世を偲ぶ仮の姿。ロシア各地に潜む家臣たちとお家再興の機を窺っているのではないか。そう考えると、彼女の立居振る舞いはどことなく品がある。ロシア語が堪能であれば、彼女の貴種流離譚が聞けたものを、と思いつつ部屋へ戻り寝る。

7月13日(2日目)

【ウラジオストック⇒ペトロパブロスク・カムチャッキー⇒パラトゥン温泉郷】

アエロフロートでペトロパブロスク・カムチャッキーへ。長身のアンナさん(通訳)がにこやかに迎えてくれた。これから帰国までずっとお世話になる。彼女は信州大学に留学したこともあり、日

本語が流暢だ。雨のペトロパブロスク・カムチャッキーを観光する。市内を走るのは大半が日本の中古車だ。ときおり日本語が書かれたままの車を見かける。①クリミア戦争の戦勝記念碑や②2008年に再建されたアレクサンドル・ネフスキー教会(ロシア正教会)を見学後、魚介類を売っている自由市場やスーパーマーケットに寄る。

①クリミア戦争(1853年~1856年)では、この地でも戦闘があった。1854年、極東の要衝だったペトロパブロスク・カムチャッキーは英仏連合艦隊の攻撃を受けるが防衛戦に勝利。戦勝記念碑には、ロシア、英仏の戦死者が共に慰霊されていた。②ロシア正教会の建物に入るのは初めてだ。神父の丁寧な説明があった。すべて木造で、カトリック教会のようなステンドグラスはなく、小さな明り取りの窓がある。ろうそくのわずかな光の中で人々は祈る。正面のイコノタス(聖障)に多くのイコン(聖像画)が描かれている。教会内に椅子が置かれていないことも特徴的だ。クリスマスには大勢の信者が集まり、立ったまま静かに祈りを捧げるそうだ。質朴ながら人々の思いが伝わり、深く印象に残る教会だった。

今夜はパラトゥンカ温泉郷のホテル・フラミンゴ泊。旧ソ連時代の保養施設を改修したホテルだ。窓の外にはダケカンバ林が揺れる。高緯度の為、7月のカムチャツカでの日の出は5時頃、日の入は9時半過ぎ。夕食には水餃子のようなペリメニが出た。カムチャツカでの食事は、スープ、サラダ、チーズ、サーモン、ボルシチ、ビーフストロガノフ等、どれもおいしくいただくことができた。薄味で香辛料も強くない。味は全般に日本人に合うと、皆さん特に女性陣に好評だった。

7月14日(3日目)

【パラトゥンカ温泉郷⇒アバチャ山麓キャンプハウス】

六輪駆動の大型車で、50km離れたキャンプハウスへ向かう。アバチャ山麓への道は途中から消え、車は涸川を無造作に遡ってゆく。シートベルトをしていても危うく、前後左右上下にひたすら揺れる。吐きそうになった頃、標高800mのキャンプハウスに到着。アバチャ山(2741m)とカリヤーク山(3456m)の鞍部にあるベースキャンプだ。

沢筋には豊かな雪渓が残る。あいにくの雨で見

晴らしは効かない。メインの食堂棟のそばにコンテナを改造した宿舎(定員8名)がいくつも並ぶ。コンテナは中央で仕切られ二段ベッド2つの部屋が左右にある。めいめい割り当てられたスペースで荷を解く。昼食後、しっかり防寒をして、霧の中を近くのラクダ山へフラワー・ハイキング。明日のアバチャ山登頂のウォーミングアップだ。花のガイドのバーリャさんが同行。彼女の説明をアンナさんが通訳してくれる。高山植物が見事。

《出会った主な花》

イワギキョウ、イワブクロ、インディアンペイントブラシ(ゴマノハグサ科)、ウルップソウ、エゾオヤマノエンドウ、エゾオヤマリンドウ、エゾツツジ、エゾノツガザクラ、エゾノハクサンイチゲ、シコタンソウ、シコタンハコベ、シベリアアズマギク、ジムカデ、チシマツガザクラ、チシマフウロ、チョウノスケソウ、ハハコヨモギ、ミネズオウ、ミヤマクワガタ、ヨツバシオガマ、リシリヒナゲシ。



①インディアンペイントブラシ

ラクダ山の下りでマーモットを見た。逃げもせず、ポーズを決めてカメラマンの期待に応えてくれた。ジリス(リス科マーモット属)がたくさんいる。キャンプハウス付近では、しきりと現れて愛嬌を振りまき、餌をねだる。事前に聞いて覚悟はしていたが、とにかく蚊の数が半端ではない。屋外へ出た途端、これでもかと襲ってくる。防虫ネットをかぶり手首に防虫リングをしても効果なし。蚊の襲撃を避けつつ30mほど離れたキジ場を往復するのも難儀だが、用を足すのに時間がかかると更に悲惨なことになる。コンテナの間仕切りスペースに蚊取線香を置いて寝る。複数のいびきが聞こえる。耳栓を持ってきて正解。部屋の中は暖かい。シュラフで寝るのは30年ぶり、なんだかワクワクする。明日は、きっといい天気だろう。

7月15日(4日目)

【アバチャ山登頂】

6時30分、起床。8時出発。サンドイッチ2つ、水2本、ジュース、りんごを受け取り、霧の中をアバチャ山へ向かう。上は晴れているようだ。同行のロシア人スタッフは3人の山岳ガイドとアンナさん(通訳)。我々を含め計16名。歩きながら思った。山中さんの関西組はよくあれだけ喋れるものだ。話題も豊富だ。いつ息継ぎをするのだろうと心配になるほど話し続けている。バテないのが不思議だ。本当に元気だ。時々、合津さんの声がある。上馬さんの生物班(森川さん、野村さん)が珍しい花や動物を見つけては写真を撮り、はしゃぐ声が聞こえる。好奇心旺盛だ。高水間さんは黙って歩いているだけで貫禄がある。現地スタッフ同士の交わすロシア語が、通奏低音のように静かに流れる。

《出会った主な花/昨日ラクダ山のフラワー・ハイキングで見た花を除く》

エゾコザクラ、チシマクマモグサ、ミヤマムラサキ、リンネソウ。

2000m台地まで来ると霧が晴れた。アバチャ山が正面にそびえる。ここで昼食。ここからの行程が長いため、数名が山頂まで行くのを躊躇していたが、天気が良く風もないことから全員でアバチャ山を目指すことになる。「さあ、行きましょう!」ツアーリーダーの小山さんの元気のいい掛け声で、皆が立ち上がる。1時出発。



②アバチャ山を背景に

8合目あたりから斜度がきつくなり、ザレ場を二歩進んでは三歩下がる(!)という苦しい登りとなる。この登りは富士山の砂走りに似ているそう。パーティ全員無口になる。振り返れば秀麗なカリヤーク山(3456m)が見えるのだが、そん

な余裕もなく黙々と頂上をめざす。左前方に、アバチャ山に連なる古アバチャ山が現れた。懐に氷河を抱いている。はるか北方には、活火山のジュパノフスカヤ山(2927m)が雲海から顔を出している。時折黒い噴煙を高く吹き上げるその山を眺めていると、太古の時代に迷い込んだのではないかと錯覚する。

午後4時15分、頂上。ロシア人山岳ガイドと握手。彼らが付かず離れずリードしてくれたお蔭でピークに立てた。山頂には見たこともない光景が広がっていた。眺望を十分楽しんでから、4時50分、下山開始。ジグザグでゆっくり登ってきた道を垂直に一気に下降する。2000m台地からは往路と別ルートを取る。正面に仰ぎ見るカリヤーク山は雄大そのもの。利尻岳に似た端正で美しい山だ。見飽きることがない。登山道の周りには可憐なりシリヒナゲシの群落。歩きにくいガレ場を、ひょうきん者のガイドのアレクシー君が3倍速で駆け下りていく。ほどなくして雲海の下にはいる。広大な雪渓を歩くが五里霧中。傾斜がきつくなった地点で雪に不慣れな2人が山岳ガイドに両脇を抱えられ、まるで連行される犯人のように濃い霧の中へ消えてゆく。午後8時20分、キャンプハウス帰着。行動時間12時間20分。標高差1950mを全員無事に往復!!

7月16日(5日目)

【フラワー・ハイキング&日露親善茶会】

今日は休息日だ。午前中、大半のメンバーがフラワー・ハイキングへ。山中さんとキャンプハウスに残る。シャワーを浴び、パッキングをしてのんびり過ごす。昼食後、食堂で森川さん(実は無手勝流の茶道家)による茶会が催された。抹茶茶碗がおもむろに取り出され、テーブル中央で茶会が始まる。メンバーひとりずつに、丁寧に抹茶が振る舞われる。通訳のアンナさん、アンナさんの可愛い娘さん、花のガイドのバーニャさん、山岳ガイド・リーダーのバジンさんも茶会に招かれた。神妙な顔をして飲む姿が微笑ましい。思わぬ日露親善となった。森川さんは日露友好の功労者として、いずれ外務大臣表彰か。

7月17日(6日目)

【キャンプハウス→パチェカズェツ山麓テント

サイト】

7時起床。9時、六輪駆動車で出発。スーパーマーケットに立ち寄り、飲み物や果物等買い出し。昼前に、標高500mのダケカンバ林に囲まれた草原のテントサイトに到着。5人のロシア人スタッフ(山岳ガイドやコック)が迎えてくれる。既にテントも張っており、食事の準備も終わっている。設営も食当もやらなくていいのだ。1年生なのにこんな大名登山をしていて良いのかと、申し訳ない気持ちになる。

テントサイトで昼食後、フラワー・ハイキングに出かける。天気は曇り。ヒグマの棲息地帯なので単独行動は禁止とのお達しが出る。樹林の中や池塘の点在する草原を3時間かけて散策する。花も多いが蚊も多い。花は短い夏を愛おしむように咲いているが、同じように蚊たちも束の間の夏を活発に過ごしている。花々を見て「日本ではありえない植生だ」と上馬さんが興味深げに言う。日本だと林床や林縁などでそれぞれ植生が異なるが、ここではそれらが混然一体となって咲いているようだ。

《出会った主な花》

ウズラバハクサンチドリ、エゾゴゼンタチバナ、エゾツツジ、エゾノツガザクラ、エゾノハクサンイチゲ、オウレン、オオバナノエンレイソウ、ガラガラ(ゴマノハグサ科)、キバナノアツモリソウ、キバナシャクナゲ、クルマユリ、クロユリ、コバイケイソウ、シモツケ、タカネバラ、チシマウロ、チシママンテマ、チシマヒョウタンボク、ツマトリソウ、ナナカマド、ハクサンチドリ、ヒメオウギアヤメ、ベニバナイチヤクソウ、マイヅルソウ、ミヤマコウゾリナ、モウセンゴケ、ヤナギラン、ワレモコウ。



③キバナノアツモリソウ

林床にはキバナノアツモリソウの大群落。最初はみんなで大騒ぎしていたが、あまりに多いので

やがて静かになる。ロシア人も好きなギョウジャニンニクは、つまんで齧ると確かにニンニクの味がする。これはギョーザ・ニンニクと誰かが言った。

食堂テントの横には焚火があり、薪が常時くべられている。キャンプサイトでの焚火なんて何十年ぶりだろう。炎を見つめているだけで心がなごむが、風向きによっては焚火の煙を全身に浴びることになる。煙に動じない、いぶし銀の合津さんが「生まれた時から囲炉裏で育ったので、煙にいぶされても大丈夫」と、さりげなく生い立ちを語る。

7月18日(7日目)

【バチェカズェツ山登頂】

8時、出発。3人の山岳ガイドにアンナさん、花のガイドのバーニャさんも加わり総勢17名。晴れたり曇ったりの天気。9時15分、林道終点の湖畔着。バチェカズェツ山は左右にU字谷を発達させており、往路は右側を復路は左側のU字谷ルートを取った。花を楽しみながら、右側の明るく開けたU字谷を川沿いに進む。樹林を抜け左岸に渡ると踏跡が無くなる。残雪量によってルートが毎年変わるのだろう。丈の低い高山植物が咲く中を登る。急峻な雪渓を登り切り、午後2時30分コル着。ヒグマの糞を発見！ ヒグマを一目見たいと上馬さんが興奮している。



④バチェカズェツ山頂にて

午後3時5分、バチェカズェツ山(1566m)ピーク。霧は晴れるが展望はあまりきかない。アバチャ山もカリヤーク山も雲に隠れている。3時25分、山頂を出発し、反対側の稜線を進む。しばらくして稜線を外れ広大なカールの中を下る。ガレ場で歩きにくい。カールの眺めに気を取られて転びそうになる。4時20分、カール下の雪渓着。

山中さんは尻セードで滑って行く。午後5時、急な雪渓終わる。6時35分、湖畔着。1時間ほど平坦な林道を歩き、午後7時30分、テントサイト帰着。行程中、誰にも会わなかった。静かでとても贅沢な登山だ。行動時間：11時間30分。

《出会った主な花/昨日山麓で見た花を除く》

イワウメ、エゾコザクラ、チングルマ、ヨコヤマリンドウ。

夕食は、コックのリュウバさんの手作りハンバーグ。思わずおかわりしてしまう。わらびのサラダもおいしかった。酒豪の合津さんと野村さんは酔うと饒舌になり、座が盛り上がった。

7月19日(8日目)

【テントサイト→川下り(ラフティング)→マルキ温泉→パラトゥンカ温泉郷】

テントサイトのスタッフに見送られ、ビーストラヤ川左岸の船着き場へ。天気は晴れ。日差しが強く暑いくらいだ。ヒグマの棲息地帯なので船着き場には番犬がいる。犬の名前はノルド、精悍な顔つきをしている。川岸のプレハブ小屋で昼食後、釣り許可証をもらう。船着き場でラフティングの準備をしているとノルドが激しく吠える声が聞こえる。スタッフの指さす数百m先を見ると、ヒグマだ！左岸を下流へ逃げていく。みんな慌ててカメラを向けるが、遠い。野村さんが超望遠で撮った貴重な1枚がこれ。



⑤ヒグマ

ビーストラヤ川はオホーツク海に注いでいる。カムチャツカには日本のイワナのような陸封型ではなく降海型の魚が多く、魚体も大きい。救命胴着をつけ釣竿を持ち、二艘のゴムボートに分乗していよいよ川下りだ。それぞれ、アレックス、サーシャという屈強な若者がボートを漕いでく

れる。川面を渡る風がさわやかだ。さっそく慣れぬ手つきでルアーを始める。3時間で尺上のオシヨロコマ（カラフトイワナ）、ニジマス、計10尾の釣果。何故かルアー未経験者ほどよく釣れた。

ラフティングの次は市民憩いの場、マルキ温泉へ。駐車場に「新潟県十日町・松之山温泉」の送迎バスが停まっている。輸入車の日本語がそのまま。川湯温泉のように河原に温泉が湧いている。多くの家族連れが思い思いに温泉を楽しんでいる。我々も水着に着替え、つかる。パラトゥンカ温泉郷への道路わきの売店でピロシキを買う。肉まんを一回り大きくした感じだ。1個を二人で分け合う。アツアツでおいしい。ようやくホテル・フランミンゴ帰着。温泉にもはいい、すっかりくつろいだ気分のまま寝る。

7月20日（9日目）

【パラトゥンカ温泉郷→ペトロパブロフスク・カムチャツキ⇒成田（解散）】

空港着。青空を背景にアバチャ山とカリヤーク山が並んでいる。出国手続きを済ませヤクーツク航空チャーター便に搭乗。シートベルトサインが点灯し機内に安堵感が広がる。ところが一向に離陸する気配がない。電気系統のトラブルにより飛行機が遅れるというアナウンスがあり、乗客全員降ろされる。空港内の制限区域（コントロールド・エリア）で、空いている椅子などに座って出発を待つ。昼食として予定されていた機内食が配られる。このまま飛ばなければ、ここで一泊か。この件ではツアーの有難味をしみじみと感じた。機内食の配布や航空会社からの情報入手、留守宅家族への遅延連絡等、一切を引受けてくれた。我々はただ待つだけでいい。仕事とはいえ添乗員の気遣いは如何ばかりか。旅先で飛行機が遅れて大変だったという話を聞くが、ツアーの場合トラブルが起きて大変なのは添乗員だ。5時間遅れで午後4時30分発。

チャーター機が成田空港に着輪した瞬間、拍手が沸き起こる。思わず隣席の高水間さんと握手。手荷物受取場で山中さんから締めのご挨拶があり解散。全行程を無事こなし、誰ひとり体調を崩すことなく帰国できて何より。関西組はこれから夜行バスで帰るとのこと。さすがに旅慣れている。

今回、高緯度地帯での登山に魅かれてPWに参

加し、山を楽しむだけでなく、人生の諸先輩から元気をいただくことができました。改めて、お礼申し上げます。

以上

[注1]高山植物名は現地フラワーガイドの説明等を基に、下記も参照しました。

豊国秀夫編『日本の高山植物』山と溪谷社。

[注2]カムチャツカ関連書

カムチャツカに関するエッセイ、漫画、交流史、古代史、漂流記、小説。意外と多いのです。

(1)広瀬健夫『住んでみたカムチャツカ』ユーラシア・ブックレット 東洋書店。著者は信州大学を定年退官後、カムチャツカ国立教育大学で9年間(1997年～2006年)教鞭を取る。カムチャツカの大学・生活・文化・自然等を紹介しており、市民の暮らしがよく分かる。

(2)矢口高雄『釣りキチ三平 平成版 三平inカムチャツカ』第5巻～11巻 講談社。

第6巻はビーストラヤ川のルアーフィッシング紀行、第10巻は高田屋嘉兵衛〔下記(6)〕の物語。

(3)セルゲイ・クズネツォフ『ロシアに渡った日本人』ユーラシア・ブックレット 東洋書店。

(4)桂川甫周『北槎聞略(ほくさぶんにやく) 大黒屋光太夫ロシア漂流記』岩波文庫。

伊勢国の回船船頭である大黒屋光太夫(1751年～1828年)の漂流譚。カムチャツカ経由シベリアを横断してペテルブルクへ行き、1791年エカテリーナⅡ世に日本への帰国を嘆願する。ちなみに日本では11月1日が紅茶の日。大黒屋光太夫がエカテリーナⅡ世のお茶会で日本人として初めて紅茶を飲んだと言われており、これを記念して制定された。

(5)井上靖『おろしや国酔夢譚』文春文庫。

『北槎聞略』をベースにした小説。1992年には、緒形拳主演で同名の映画にもなった。

(6)司馬遼太郎『菜の花の沖』文春文庫。

蝦夷地経営で財を成した回船業者・高田屋嘉兵衛(1769年～1827年)の実話を小説化。第6巻は高田屋嘉兵衛のカムチャツカ滞在～日本への帰国まで。

(7)菊池俊彦『オホーツクの古代史』平凡社新書。

(8)小林多喜二『蟹工船』新潮文庫。

(9)梨木香歩『渡りの足跡』新潮文庫。

写真提供

①③⑤野村さん、②森川さん、④小島。

「ロールスロイスに乗った貴公子が、バラの花束を持ってお迎え」なんて、夢みtainな話を、先日体験しました。

その実態は、「かの光岡自動車によるセドリックの改造車に乗った、41年ぶりの小学校の同窓生が・・・」となります。(しばし、我慢して下さいませ)

金沢には、金沢大付属なる特殊コースがあります。中学からそちらへの進学で街へ出るようになった私には、ガキ・鼻垂れ時代の彼らの印象が、小6でストップ。思春期の大変身過程を見ていません。遊んだかも・・・までで、話らしい話をした覚えもありません。

そんなガキのうちの一人であったN氏が、長じて山遊びを始め、分県ガイドの本で「あの節ちゃんだ！」と気づき、「懐かしさのあまり」、連絡してきた・・・ということだったのです。

あの幼な顔をどう長くして大人顔、いえ還暦越え顔にすれば・・・睫毛の長い子だったはず・・・。笑顔で花束を持ち、降り立つ姿は、予想通り、和製アラン・ドロン(舩添知事に近い、いわゆる濃い顔)が、やや禿げた風情でした。

託児所時代からの集合写真を広げて、同窓生のその後を聞き、彼の波乱の人生を聞き、「でもN君、そのイケメン顔なら、さぞやいい思いをしてきたでしょ？」と言うと、「いやあ、ご馳走様の目にはずいぶん合わせてもらったよ」

そんなきわどい話にも大笑いしつつ、ロールスロイス外観車で、医王の里や、宝達山までドライブ。すれ違う人達の啞然の視線に、ティアラを用意するんだっと思った・・・。

そう、「私もてたの！」という話です！いやいや、ここで強調したいのは二つです。

時空を越えて共通話題となれるような山遊びを、趣味としていてよかったあとと思ったこと。そして「ロールスロイスでお迎え」ならぬ、「正真正銘のお迎え」が近い年齢になったことを自覚させられた・・・ということなのです。

これまで、何でも前向きに、自分で判断し、自分で切り開いてきた・・・と思ってきました。そ

れが、周囲というものが先に現とあって、自分はその中で泳いでいたにすぎず、支えてもらっていたことの方が余りにも多い！・・・こんな発想になってくるのが、成熟、老境、の徴です。そして「お迎えが近い側になった」ということなのです。

つつい高校生後半くらいが、自分の人生の始まりのように錯覚してきました。でも、もの心つかない頃にも存在を共有していた人達がいる、「自分」ができあがっていったのです。思わぬドイツから、発想がそこへ行く・・・つくづく、ああこれが晩年なのだと思った次第です。

さて、あらゆる理由をつけて「山へ行く」私です。いつでも「今しか行けない！」ではあるのですが、そこに「たぶん、もう来ない。これが見納めかも・・・」が入ってきたゆえ、「晩年」をタイトルにつけました。そんな動機で今夏、「旭岳～トムラウシ山縦走ツアー」に申込みました。

かつて、日本百名山を完踏の時、トムラウシ山を「済み」と除けておける・・・は、幸いな事でした。渡渉が難とされる幌尻岳を除けば、他の北海道の百名山は、日帰り可能な山ばかりです。そしてトムラウシも、東大雪荘からの日帰りで消化される場合が多いようです。でも、そうしたら、北海道の山を味わったことになるのか？

贅沢な話ですが、北海道にしかありえない広大な高山帯をセットにしてこそそのトムラウシ・・・。ワングル時代のような山中8泊の山旅は不可能として、今回もせめて高根ガ原をくっつけなければ、『見納め』には該当しない！」が、私のこだわりでした。

多くの海外トレッキングが、実は大名山行です。ポーターがいてくれ、いざとなればいつでも背中のデイパックすら担いでもらえます。貧しい国の辺鄙な山は、人件費が安く、現金仕事を渴望する人達に支えられています。かえって日本の、避難小屋泊まりの山の方が、自身で担ぐ荷が重くなり、体力勝負の面がでてきます。最近はその発想で、「今しか」とか「見納め」とかで、行先を選んでいきます。

大昔、ワングル時代ならこそやれたのが、石狩岳(音更山)～トムラウシ山～旭岳の大縦走でし

た。当時もそれなりに、学生時代しかやれない・・・とは思っていました。それが、リタイア世代になり、再び、夏の10日間なんて時間が使えるようになってみると、やはりあれは昔話！と、さらに遠い目で振り返るしかありません。

山ガイド業の確立した現在、お金次第でテント山行も味わえます。しかし、いくら空身にしてももらったとしても、それだけの期間のテント暮らし・・・連日湿りっぱなしで、体を折って座りっぱなしになる生活に耐えられるものか・・・。“NO！！”

山が好きだの、年間何日だのといっても、それは快適な山小屋に支えられ、乾燥室や臭くないトイレも当然。衣類から装備まで、「昔は・・・」と言いつつも、つい速乾や、軽量へと買い替えをやっています。

「明治は遠くなりにはけり」と同様、「ワングル時代は遠くなりにはけり」が、いくら山現役と頑張ってみても、思い知る事なのです。

ワングルOB会報なら、もう少し昔話を続けても許されるでしょうね。

2回生の夏合宿後に、PWとしてこのロングコースにチャレンジしました。今なら、ロングトレイルというべきです。しかも、10カ月前には募集が行われ、月1回のミーティングが継続されました。暇で生真面目な時代だった・・・そんなことまで懐かしいです。

メンバーは夏合宿で同じパーティーだった渡辺君、松縄氏、そして哲ちゃん、親分は院生の芝田さんと長岡さん。そう、低レベル放射線研究棟に神妙な顔で出入りしていました。どこも、今では広大な金沢城公園の芝生広場です。(ただし、クマが出没したりもしています)

30キロを越えたキスリングは自分で持上げることすら不可能で、いちいち渡辺君が高みへ置き直してくれたこと、クマよけの笛吹きや、抵抗するハイ松の枝のかき分けが辛かったこと、強烈なブヨに哲ちゃんの腕がポパイみたいに腫れ上がったこと、雨の避難小屋で板の間を占拠できるも、あとから来た京産大との間に冷やっとした空気が流れたこと、白雲の石室で残飯あさりのクマを見下ろしたこと、下山してから渡辺君の実家に寄り、5人で3キロのジンギスカン肉をたいらげたこと・・・

その同じコースを、3回生の時には、「夏合宿を全国展開で」のスローガンの元、初めての北海道での合宿が決まり、再度歩くことになりました。今度は初々しい1回生が4名加わり、その中には山へ行く度、500gずつ体重が増加してしまうと嘆いていた和子さんもいました。新トレの時には、潔君、モデルみみたいな細さで、高三郎に耐えられるかと心配してたのにね。

(渡辺君も和子さんも、もうあの世の人です)

高根ガ原は、フライパンを伏せたような高原です。天気がよくて、じりじり焼かれるほどでしたから、ましてそんな比喻になります。そんなところを1時間1ピッチのペースで黙々、延々歩き続けると、私の場合、上記のように徐々に、芋づる式に、あんなこともあった、こんなこともあった・・・とワングル時代を思い出すことになりました。そして今、全然別の人達と、こうして歩いている方が、かえって不思議で、こちらが幻に思えたりもしました。

ふと我にかえって、「時は流れた～」のメロディーが流れてしまう・・・そんな時間が繰り返されました。

ワングル時代は2回とも景色の方は、ガスの日が多かったのでしょう。沼の原でのトムラウシを浮かべた夕焼け以外には、忘れえぬというレベルでの記憶がありません。

ですから、今回は、景色については、新鮮でした(忘却はなはだしい・・・とも思いました)。花も多かった・・・という漠然とした記憶はあるのですが、今回の方が「よく見た」気がします。

本当は今回に限らず、景色も花も、今の方がよく見ているといえます。経験値があがってきた(判る山が増えた、花を覚えた)せいもありますが、これもまた、晩年だから・・・という気がします。たぶん昔の現役時代は、ワングル漬けでいながらも「こんなことをしていいのか?」とか「自分は何者になるのか?」の不安が渦巻いて、見ているようでいて、見ていなかった・・・見ていながら不安のフォーカスがかかっていたように、今は思います。

景色や花が身にしみて美しいと思えるのは、見納めが近づいているせい・・・と、私はひそかに思っています。

トムラウシ山については、2009年7月の大遭難を忘れるわけにはいきません。今回、私は「見納め」に意識がいくあまり、北沼から始まったこの悲劇については予習していきませんでした。当然、現地での話題はその話にいき、眼下で青い空を映す沼の、そこから流れ出す沢の渡渉直後から犠牲者が出ていったことを知りました。

帰沢してから、ネットで検索し、さらに事件をたどることができました。

今さらのように、犠牲者達は今回の私達と変わらぬ中高年登山者たちでした。つい5日ほど前に歩いた、光あふれ、花のあふれていた場所で、実際には次々と人が倒れていったのだという事実には震撼とさせられました。

映像の中で取材を受けていた遭対隊長は、見覚えのある老ガイドでした。

3年前の初夏、アポイ岳からの帰路でリーダーが転倒・手首骨折というアクシデントがありました。急遽、次のオロフレ山は現地ガイドに交替となり、その彼が先頭を歩いてくれたのです。

好天や花に歓声を上げた一行のうちの一人が「こんな綺麗な所で、ガイドのお仕事ができるなんて、幸せですねえ」と、能天気な発言をしました。

「ううん、因果な仕事を選んだと思うよ。お金を払って、行きたい山に行けるあんた達の方が、よっぽど幸せだって。おりゃあ、そう思うよ」

騒然の映像を見た今は、彼にはもっともっと、達観するところがあったのではと思います。

さて、冒頭のN君とのデートについては、さらに種明かしをすると、退職近くに患ったうつ病（本人がそう言っていた）の、反動のハイにあたる時期であったゆえのこととわかりました。これが真相、もて話の「オチ」です。

それを知ると、なおのこと、男性諸氏には強調したいですね。

晩年こそ、臆面なく、女性(女房を含め)には花束を!!

頑張ってきた人生、ご縁のあった人生を讃えあいましょう!

(追記)

ここまでを仕上げたのが9月26日。翌日妙高山の麓の温泉宿で「御嶽噴火」のテロップが流れました。「どこの御嶽？」でしたが、その後、紅葉の山から上る噴煙が映し出されました。

戦後最大の山岳遭難事故は10月17日、56名死亡確認、7名が行方不明のまま、捜索打ち切りとなりました。

このことで、トムラウシ遭難の方は、一気に大過去となりました。中高年、ツアー登山、装備、天候・・・多くの課題が問いかかれたあの事故に対して、日本山岳ガイド協会からの総合検証は、5年を経過したこの5月に出されたばかりでした。

トムラウシだけではなく、異常気象もからんで、次々新しい被災ニュースが、前の事故を過去へ押し流していきます。

人の運命はわからないものですね。

あまりに無力ながら、せめて今日ある命には感謝。ご縁のあった人に感謝。

歓声の聞けるうちに、花束を!!



古希を迎えたから、という訳でもないが、本や古い資料が多くなった書棚を片付けていたら、大学四年時に書いたと思われる原稿を見つけた。昔から悪筆だから、間違いなく自分の書いたものである。読んでみると在りし日の自分が見えてきた。そして48年ほど前の自分も今の自分も根はほとんどに変わっておらず懐かしいとも、気恥しいとも、未だに成長もしていないとも感じた次第である。よくもこんなナーバスな情緒の自分が世に出てからは営業職一本でやって来たものだと思う。BtoB型の営業だから出来たのかもしれない。こんな若き日の自分を人様に見て頂く価値はないが、他の方にもこんな機会があり、今昔の自分と対面することがあろうと思う。

以下はその48年前の原稿の全文である。

「いつかある日」

自然との対話、それは私の一番嬉しいひと時であった。自然は語り、そして問う。しかし、何も強要しなかった、私は全く抵抗なく自然を許容できたのだらう。

私は、自然の中に人間社会に於けるとは全く違う、支配される喜びを見出し求めていたもののようなのである。

この自然に、私は現実に当面した悩みも矛盾も一度は預けてその整理と解決に一役買って貰っていた。何故か私は、人間たちより自然に向かったの方が奥底まで投げ出して本音を吐くことが出来たのである。彼女（自然）たちは、見栄も外聞も嫌っていた。だから、私も安心して身を委ね、謙虚に我に返って反省することが出来たのだった。

多くが、人間関係が元で起る矛盾、軋轢、不信、その度に、私に協力を惜しまなかったのが、人様ならぬ彼女たちであった。

この四年間、狭い金沢に限ってみてもこうした最も献身的な自然の恋人に恵まれたと思う。医王山、内灘砂丘、犀川と言うのが彼女たちの名であった。いずれも自然というにはおこがましい程小さなものにすぎない。

けれども、名もなく貧しい彼女たちこそ私に一番素直に自分を吐露させてくれた、忘れがたい存在だった。

進歩とも退歩ともいえない私のこの四年間の精神的当惑、混乱、変遷のなかにあつて、彼女たちは私に変化を試みる動機を与えてくれた。私は彼女たちに向かって宣言したが、それは人間に向かって宣言するよりも、余程素直で開放的で生の愉悦のあるものだった。

彼女たちは、その寛大さの故に夢の中へ私を解き放つに留まらず、勇気づけてくれた。

アカシアの花香る砂山を人前ではついぞ口ずさむ事のなかった詩を、叩きつけるように歌って大根布まで彷徨したのも、残雪の医王山に一人さまよったのも何故だ？何のためだ？

今、犀川の岸辺に立ち流れゆく水面を無心に眺めていると、短かった四年間の「いつかある日」が幻の如く眼前を流れ過ぎてゆく。

1966年1月頃に記す



私が大学を卒業して1年位してか、赤地キッコさんが、大阪で結婚式をあげると云うので同期の私も呼ばれて出席したの。終わってロビーにワンゲルの男の先輩の人が二三人？いてね。「今日、泊まる場所がないなら僕の家に来る？」と、8期の伊豫さんが声を掛けてくれたの。大学の頃、あまりもてななかった私としたら結婚している人だとしても誘ってくれた事がすごく嬉しく、けど、その時、それ以上にこんな人に廻り合った、知り合った喜びが大きく、こんな人がいるんだと話もしていないのに一瞬にして大きなものが私の心に残ったの。私の心に伊豫欣二という駒がぽっかりと入り込んだの。でも、そのまま、忘れることもなく日々が過ぎていったの。



その日は泊めてもらったのよ。奥さんもワンゲルの人で10期の敦子さん。その人は何故か知っている人だった。

やまざとを見ていると伊豫さんが、こんな山に行っているんだとか、何周年の行事にも行っているんだと見ていたけど会いたいとか電話しようとは思わなかったの。ところが今年の6月に私のケイタイに長岡さんの高三郎に現役と行った話が入ってきて、そして次に、現役と高三郎に行つて良かったねというコメント、そしてその後伊豫という文字。目が点になり、伊豫さんだーと、それに返信を打つたの。「40年前に赤地さんの結婚式で僕の家においでよと云ってもらった矢津です。後輩のことは覚えてないかもね・・・」ところが、次の日の朝、「あなたのことは、はっきりと覚えていますよ。いまお会いしても解ると思いますよ・・・」と。

人生最大の喜びの時でした。愛は命、愛を受けた瞬間でした。その後、数回メールでお話してて、

これはどういうことなんだろうと思ひ、私の師に、本当の師にこんな事があつたんだけど、これは何ですか？と訊ねたところ、それは絶対愛だよ。

忘れようたつて忘れられるもんじゃない。絶対愛つて何？ふれてもいないのに抱き合つてもいないのにそこには、はっきりとしたものが流れているのかなあ～純真無垢な何か。

この7月OB南竜集中PWに行くというので、スイカの2S送ろうか？と云つても返事がないのでメロン送りますか？小さいよ！・・・に喜んでボッカしますと、なつかしい嬉しいお言葉。

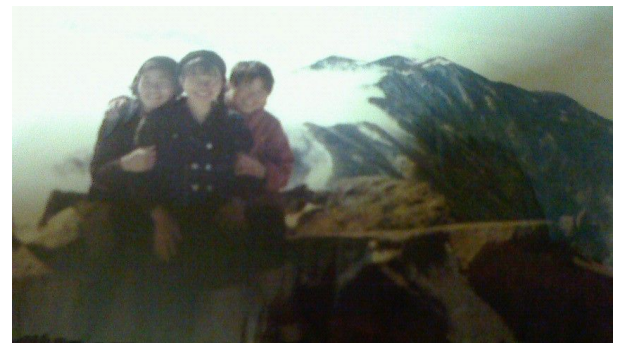
28日に丁度熟している様に届けてもらいました。

南龍で10等分していただいたよ。おいしかったよとメールをいただき、さらに8期の大親友の穴田昭一さんより、さっそくのお礼のはがきをいただきました。

3人がヤマギシのメロンをパクリしている写真よ。でもね、その中に伊豫さんがいないのよ。一人で大笑いしました。それで、さっそく穴田さんにお礼のたよりを便せん2枚で送りました。何書いたんだろうね、知らない人に、でもきつといい手紙だったと思うよ。

それとね、近頃、知つたんだけど不思議な事に、私ね一年生の時、三年の金粕恵子さんと卒業して高井敦子さんの3人で南龍から本峰に雪の中行つてるのね。10月9日から12日、全然忘れてたの。でも古いアルバム見てたら出てきたの。敦子さんと山に登つてる・・・。そして金粕恵子さん(12期)は7年程前に亡くなつたと聞きました。

この話、恵子さん上で聞いてるよね。



山に行きましたの話じゃないけど、ワンゲルにまつわるこんな話もすてきでは。

人生最大級のすてきな出来事です。皆さんに聞いてもらつて、嬉しいわ。

【事務局から】

OB会費 納入のお願い（継続）

平成26年から5年間分の会費につきましては、お陰様をもちまして平成26年11月末時点で164万円の入金を頂きました。ご納入頂きました会員の皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

皆様から納入頂いた会費は、本誌の発行、ベルクハイムの維持補修、現役への支援などに有効に活用させて頂いております。

引き続き、未納の会員におかれましては納入にご協力をお願いしたく、ご案内申し上げます。

なお、納入確認などの会費に関するご照会は会計担当（末尾記載）がメールにて承りますので、遠慮なくご連絡ください。

（参考）

前期（平成21年～25年）の会費入金額 241万円

会費の払込について

1. 金額

- ・ 年額2,000円ですが、可能な限り5年間の一括払い（＝10,000円）にて納入いただければ幸いです。

2. 納入方法

- ・ 昨年発行の本誌に郵便局の払込用紙（青色の印刷のもの）を同封してありますので、郵便局から払い込んでください。

（恐れ入りますが、手数料は各自のご負担となります。）

- ・ その際、金額(10,000円)、住所、氏名、ご自分の「期」をご記入ください。
- ・ 銀行振込でもOKです。その場合は次の口座へお願いします。

北國銀行本店営業部（101） 普通預金No.223703

ゆうちょ銀行〇七九（ゼロナナキュウ）支店 当座預金 No. 0014120

カナザワ ダイガク ワンダーフォーゲルブ オービーカイ

どちらも口座名義は、「金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会」です。

会計担当 黒崎 敏男(22期) kuro@pure.ocn.ne.jp

